夜明けのオオカミ―The Days of Atrazia―

pandi剛種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜明けのオオカミ―Ｔｈｅ　Ｄａｙｓ　ｏｆ　Ａｔｒａｚｉａ―

【Ｎコード】
Ｎ３７２５Ｚ

【作者名】
ｐａｎｄｉ剛種

【あらすじ】
「リンケージ、ああ、こういうことだ。あんたたちもよくわかってるはずだ」
トリフィア第一惑星に住む主人公デイズ・オークスはある日元上司でありトリフィア軍事基地のトップ、ゴルド・ミルドレシア総帥に呼び出された。かつて自分を首にした男から告げた言葉は「保護した三人のリンケージチルドレンとお前を使い銀河を征服する」との事だった。紹介された三人の少女は皆幼く、デイズは三人の心と体に『繋がり』ながら、ゴルドの下、仲間と共に広が

る宇宙へと手を伸ばしていく。

に載せたのを移送中、消さないでね（＊、ω、＊）

渋ちゃんの方

夜明けを見つめて（前書き）

移送開始します

夜明けを見つめて

昨日見たのは、夜空いっぱい浮かぶ星と雲。
ふわりふわりと浮かんで空を流れる雲は、いつか明ける東の空へとゆっくりと溶けていくのだった。
星はきらきらと光っていて、光のおかげで足元が明るい。
登ってきた山は薄暗くて、何も見えなくて、視界の開けた丘からは街の灯りが溢れていて、目が少し痛い。
私は少しランタンを持ち上げ炎を覗きこむ。
火は星の灯りに霞んで、それでもキラキラと瞬いている。
強いくらいに。
あの星は何？
そう尋ねて、返してくれる大人は、私の傍にはいなかった。
そんな世界。
夜の風が靡いて、髪が少し乱れる。
影が夜空を見上げる私の足もとで揺れて、私は白い息を吐いてマフラーを口元まで持ち上げた。
寒くて、赤っ鼻をすすりながら、私は目を空に向けて細める。
世界の外が、私の目に映った。
小さな星の世界。
砂漠だらけの星や、一面水に覆われた星。
色んな世界があって、その中で私は自分だけの居場所を見つけられるのだろうか。
ビュウウゥって風の音色が耳元をつんざく。
裏山の木々がザワザワってしなって、薄暗い手元の灯りがゆらゆらと左右に首を振っている。

口元のマフラーを拭って、私はそっと持ち上げたランタンの蓋を開く。
フッと息を吹きかけると、明りが消えて暗闇があたり一面に広がり、私はゆっくりと両膝を折った。
草むらに置いたランタンが足元に横たわる。
明日は処女航海の日。
――行ってくるね。
明るくなる水平線を見つめながら、私はそう呟いて、草むらに隠れるランタンに手を振ると立ち上がる。
背中を反らし息を吸い込んで、身体で呼吸をする。
夜の空気が胸にしみてくるのがわかって、私は胸に手をあてて、夜空を見上げながらゆっくりと目を閉じた。
暗闇の中、星の灯りを感じる。
ぼぉっとした熱っぽさが点々を頭上に灯って、私を包んでいく。
ざわめく木々の匂い。
山が、少しさみしそうに嘶いているのがわかる。
――いつか、帰ってくるから。
登る朝日を背に向けながら、私は後ろに広がる鬱蒼とした木々へ振り返って、それから小さく手を振った。
夜風が応えてくれるように、激しく木々を揺らしてくれる。
嬉しかった。
私は目を細め、コクリと頷くと風にマフラーを靡かせながら、後ろ向いて地面をけった。
――行ってきますっ。
スゥと後ろに体が引っ張られる感覚。
崖に近い丘から飛び降りて、冷たい空の中に身体をギュッと丸めながら、私はきつく目を閉じる。
瞼の裏に浮かぶのは暗闇。
暗闇の奥に映るのは、風にそよぐ草原。
暗闇に漂いながら、大きな背中が私の前に立ち、地平線を背に手

を伸ばす。
夜明けに手を伸ばす――
――行こうっ。

1話目

惑星ミルドレシア、ソロン、ターキスの三星が中心となって、宇宙連合が出来上がったのが約二千年前。
宇宙船を始めとした機械技術の発展。
空間跳躍技術やブラックホール重力エネルギー構想など、新しい技術の開発。
そして移民政策や、外惑星国家との戦争、そして和平交渉。
宇宙開発の急激な進行と、宇宙開拓はその二千年の内大きく進み、宇宙連合の枠組みを肥大化させていった。
宇宙連合と称された三つの惑星間連携は、百年後には星系間連携へと膨らんだ。
星系間連携が一通り終わると、銀河間連合が形成された。
ミルドレシア銀河系連合は、隣のタロス銀河系と大きな一つの提携を結び、巨大な国家が一つ、宇宙に出来上がった。
こうして、ミルドレシア・タロス銀河系連合ができあがったのが今から二百年前。
他の多くの星々を飲み込んで、出来た白い天の川が、今も天高い所から我々を見守ってくれるだろう。
まさに神の如く。
もちろん奴らに逆らわなければ、だが。

朝から、おかしな電話だった。
「んぁ……」
プルルルルゥ……。
東の窓から燦々と降り注ぐ日差しを背に浴び、ベッドに身体を横たえる男の耳元で、電話が鳴る。
頭ごと枕で耳を覆っても、響く甲高い叫び声。
枕元に置いた小型の情報端末がけたたましく震える。
「……」
男は苛立ちを滲ませながら、手元に置いていたPDAを掴んで投げ飛ばす。
綺麗に壁に突き刺さった情報端末はそれでも主の着信を待つ。
その内止むだろうと、男はムッと口を尖らせながらも、身体を丸め災厄が過ぎ去るのをじっと待った。
一分待つ。
プルルルルゥッ。
五分待つ。
プルルルッルルッ
徐々にもたげる柔らかな眠気も、耳元のけたたましい音にかき消される。
「……眠い」
――次は電源を落として寝よう。
そんな事を考えながら、男はもぞもぞと枕に隠していた頭を持ち上げベッドから足を下ろした。

上半身は肌蹴たまま、日差しに鈍く照らされる褐色の肌。
昨日家に帰宅した後そのまま寝たのか、下には黒のジーンズがよれよれのまま履かれている。
短めに切られた銀色の髪を掻きながら、男は体を引きずるように前のめりに壁に刺さったＰＤＡに手を伸ばす。
「……ったく」
――エミリア・ハートマン――
発信元がＰＤＡに表示されて、零れる苦笑い。
表面のディスプレイに指を這わせるままに、男は不機嫌そうに目を細めると、ＰＤＡをベッドへと放り投げた。
「……何の用だ」
『お久しぶりです大尉っ』
ＰＤＡから甲高い声が響き、画面に表示される女の顔。
男は眠たそうに目を細めながら、床に散らかったワイシャツを拾い上げては、通信の向こうの女に呻いた。
「……二年ぶりだな。元気してたかエミリア少尉」
『もちもちですっ。大尉が軍を抜けてからも、日々訓練と鍛錬は常に欠かさず行ってきましたっ』
「エディオールからは……隊が解散してから、お前は事務仕事に回されたと聞いたが」
『――えへっ』
「方便なら、もう少しわかりにくいのを吐いてみせろよ……」
言葉を詰まらせるエミリアに苦笑いを滲ませながら、男は拾い上げたワイシャツに袖を通した。
白い襟元に隠れる銀の首輪。
首に吸いつくような感覚の首輪を撫でながら、男は欠伸を噛みしめながら寝室の窓へと歩み寄る。
「まぁ与太話はいいさ。何の用だよ」
『軍からのお願いです』
カーテンを開け、零れる朝焼けの光。

眩さに寝ぼけ眼の目を細めると、透き通る銀髪を掻き上げ、男は緩慢な動きで後ろを振り返った。
「お前が小間使い役か。……相手は誰だ」
『誰だと思います？』
「夜勤明けで頭が働かんのよ。おっさんいじめんでくれ」
『失礼しました。うちの大将、ゴルド・ミルドレシア准将閣下からの通達があります』
――目が覚める物言いだった。
男はハッと紅く滲んだ眼を開くと、ベッドに横たわるＰＤＡへとの所へと歩み寄った。
「……じいさんから？」
『はい――あ、大尉の顔、久しぶりに拝見させてもらいましたっ』
ＰＤＡのディスプレイを覗きこめば、そこには少女のような幼い顔のエミリアが制服姿で映っていった。
男はワイシャツのボタンを止め、嬉しそうに笑顔を零すエミリアに話しかける。
「エミリア。じじいはなんて言ってる？」
『惑星トリフィア時間午前九時にトリフィア第一軍事基地に来るように、とのことです』
「……命令口調か。俺は軍から放逐された身なんだが」
『左遷された私と似たようなもんですよ。……そっちに向かっていますんで用意しててください』
「あいよ……」
『なお、現在所属している民間会社との労働契約は破棄するようにとのことです』
ワイシャツのボタンを留めていた手がピタリと止まる。
背筋が凍る思いがして、男は苦々しい表情で口元を引きつらせると、震えた手つきで恐る恐るＰＤＡを覗き込んだ。
「……おい」
『あ、大尉の口。まだ牙があるんですね。遺伝子抑制聞いてないん

でしょうか』
「……エミリア少尉」
『はいはい。この通達は極秘につき、民間との接触は極力避けてほしいとの事なので』
「俺は話を聞きに行くだけなんだが……」
『私どもの方で先日付けでリタ届出しておいたので、安心していいですよ』
「……」
『あと十分ぐらいでそちらのマンションに向かいますので、準備しておいてください。以上です』
「……最悪」
男はＰＤＡの電源を落とし、苛立ち紛れにベッドに投げ飛ばす。
トリフィアの朝焼けが目にしみ、男は寝息交じりに目を細め、ワイシャツのボタンをとめていく。
「……急な話だ」
窓に映るもう一人の自分に呟きながら顎元をさすれば、無精髭がチクチクと手の平を撫でる。
剃る時間は残されてなく、男は諦め気味に目を細めると、寝室に備え付けられた机に手を伸ばした。
そこには数枚の写真立てと、古めかしい時計。
そして、一丁の拳銃。
この時代、レーザーエミッターやエネルギーガンが普及している中で珍しい実弾銃だった。
シリンダーを開けば、込められているのは五つの弾。
弾薬込みで男の給料の二カ月が吹っ飛ぶくらいの代物は、朝日に照らされ銀のフレームを光らせる。
「……ゴルド爺さん。まだ生きてるか。あの死に損ないが」
重たげな動作でシリンダーが銃の中央に収まる。
獅子鼻のような巨大なノズルを先端に取り付けた巨大なバレルが腰のベルトに捻じりこまれる。

靡いて翻る白いワイシャツ。
時計を腕に巻き、机に並べられた写真立てを一つ一つ倒していき、男は踵を返す。
「――行ってくるよ」
ベッドの上に転がっていたサングラスとＰＤＡを胸ポケットに引っかけると、男は寝室の扉に手を掛けた。
リビングに出れば、部屋全体を掃除している数体のメイドロボットがいる。
手のひらサイズの機械もあれば、二機のヒューマノイドロボットが掃除機をかけている姿も見えた。
ただ何体もロボットが配置されながら、リビングは狭く感じさせないほどに広い。
「……おはよう」
「おはようございます、旦那様」
男の言葉に、皆一様の顔を上げると、こちらに頭を下げて機械音声を向けてくれる。
「旦那様。ご予定では、今日はお休みのはずでは」
「予定が入った。もう出ていく」
「お帰りはいつほどになりますか？」
「追って連絡するが、しばらくは帰ってこないかもな」
そう言って男は洗面台の前に立ち、寝癖で立った髪を適当に梳いて、顔を水で叩くように濡らした。
「わかりました。気をつけて行ってきてくださいませ」
「留守番頼む。……俺一人しかいないがな」
タオルが差し出され男は顔を拭うと、そう言って傍に佇むメイドに苦笑いを滲ませながら踵を返した。
プルルルルゥッ
胸元で激しい着信音が鳴り響く。
男はサングラスをつけＰＤＡを起動すると、画面に浮かぶエミリアの姿に顔を引きつらせた。

「早いな」
『じいさんが急かしているんですよ。もうマンション下まで来ましたから』
「老人は早起きでやだねぇ……」
ＰＤＡをポケットに捩じりこみながら、ため息が零れる。
男は数人のメイドを後ろにつき従えながら、うんざりとした表情で玄関までのろのろとした足取りで赴く。
「……何かあれば連絡をくれ」
「お気をつけて」
「ありがとう」
見送るメイドロボを尻目に、靴ひもを結びながら男は照れくさそうに口の端を歪めてそう言った。
そして玄関の扉を開けば、朝の光が零れる。
吹き込む潮の風。
遠くまで見渡せるマンションの二十五階からは、海岸線に沿って並ぶ街並みが朝焼けに照らされて見えた。
道路には、地面から浮いた車がいくつも走り、空には惑星圏内を飛ぶ飛行艇が既に頭上を横切る。
地平線には大気圏脱出の為の滑走路が空に向かって反り上がって浮かぶ。
そして、その滑走路に乗って、巨大な宇宙船が空へと昇っていく。
朝焼けの空には白い雲。
そして空に霞んで浮かぶ巨大なリングが、朝日に紅く滲んでいる。
それは惑星トリフィアの朝。
男は少し騒がしくなってきた朝の景色に肩をすくめるままに、後ろを振り返るとクッとサングラスを持ち上げた。
「――じゃあ、行ってくるよ」
「行ってらっしゃいませ。デイズ様」
玄関に並ぶ数体のメイドロボに少し乾いた笑みを滲ませると、男、デイズ・オークスは手を振って踵を返した。

――寂しい人間かねぇ。
零れる白いため息。
ぼんやりとそんな事を考えながら、デイズはずれるサングラスを掛け直し、エレベーターの匡体に身体をゆだねた。
（自業自得、か……）
エレベーターの扉は直ぐに開き、デイズは滲ませた苦笑いを隠すとマンションの外に足を踏み出す。
潮風に靡くワイシャツ。
手持無沙汰にかきあげる銀の髪。
首元の首輪を摩りながら歩み寄る褐色の銀髪の男の姿が、車の黒い装甲に浮かぶ。
「おはようございます、大尉」
そう言ってマンション前に止めた黒い車両の前で、制服姿の女が男に頭を下げた。
デイズはサングラスを持ち上げると、懐かしむように紅い目を細め、目の前の小柄な女性を見下ろす。
「おはよう。エミリア。……何年ぶりのセリフだろうな」
「二年ですね。しばらく会っていませんでしたから」
少し照れくさそうに笑うと、栗毛の女、エミリア・ハートマン幼い笑顔で、グッとデイズに手を突き出した。
「本当に……久しぶりです」
「俺に会わないよう、かん口令でも敷かれていたのか？」
「――業務上の機密です」
「そりゃ仕方ない」
そう言って、自分の半分ほどの背丈くらいに思える小柄な女性を前に、デイズは戸惑いがちに笑みを浮かべ握手に応じる。
「皆、変わりないか？」
「はいっ」
「じじいは？」
「ゴルドじいさんは軍港にいます。あなたと話したいと急かしてい

ますよっ」
「くそじじいが……」
苦い笑みを滲ませながら、デイズはエミリアから手を離すと、縦に長い車両の後部座席のドアを開いた。
革のシートに身体が沈み、同時に浮遊する車両がずんと沈み、又浮かびあがる。
「じいさんはどうだ？」
「エディオールさんの話では年々元気なっているとのことですよ」
「ああ、そ……」
前方の運転席に座るエミリアの背中を見つめながら、その言葉にデイズはげんなりとした表情でサングラスを外した。
「やっぱりゴルドじいさんはお嫌いですか？」
「早くぽっくり死んでくれとは思ってるよ」
無音のまま、静かに流れていく海岸線を尻目に、デイズは気だるそうに足を組みサングラスを胸ポケットにねじ込む。
「しかし。なんでじじいは俺を呼び戻したのかねぇ」
「なんでも、あなたにしか頼めない事のようです」
「でないと困る。こっちはもう無職だからな」
「あはは……すいません、隊長」
「隊がないのに隊長はやめてくれ。まだゴルドのじじいの指揮下にあると勘違いしてしまう」
欠伸を噛み殺すと、流れる景色を覗きこみ、デイズは朝日に紅い瞳を細めた。
巨大な滑走路から空へと上がる宇宙船。
背部からキラキラと無数の粒子を撒き散らしながら、日差しに照らされ船は加速し大気圏の外へと昇っていく。
それは尾を引く流星のように――
「……また、宇宙か」
「なんか言いました？」怪訝そうに首を傾げるエミリアを横目に、デイズは目を伏せると腕を組んだまま背中を丸めた。

「基地に着いたら起こしてくれ、エミリア」
言うや否やデイズの呼吸に寝息が混じる。
ゴォオオオオッ
小島程の大きさもある宇宙船は空へと昇るままに、青白い空へと昇り、やがて空を流れる巨大なリングへと吸い込まれる。
大きくたわむ空の景色。
水面に石を投げ込んだように波紋が空全体に走り、朝焼けに滲んだ空の向こうへ船は消えていく。
蒼い空に、宇宙船が横切っていく、今日は宇宙晴れだった。

幕間：手を伸ばすほどに

触れたときに感じたのは、空の色。
どこまでも澄んでいて、手を入れたら身体がどこまでも沈んでいきそうなくらいに、深い色。
匂うのは少し大人の匂い。
汗臭くて、少しお酒臭い、そんな匂い。
ゴワゴワとしている手の感触が残ってる。
目を開いて覗きこめば、夢の中で、水面にあの人が映る。
大きな背中をした、あの人。
――意識が広がっていく
心がどんどんと膨らんでいくのがわかる。
手に触れたい、ギュッて手を握りたい。
会って話がしたい。
小さな事でいい。何でもいいからあの人と言葉を交わしたい。
会いたい――

2話目

「大尉？」
ガコンと大きく揺れる車体。
車を格納した巨大なエレベーターが、周囲を金属の壁に包んだまま横滑りするように階下へと降りていく。
「――ったく……」
「……。なんか照れてます？顔少し紅いですし、なんかそわそわしてる」
「……肌が黒いのにわからんだろうに」
「なんとなく」
トリフィア第一軍事基地。
デイズが住んでいるトリフィア第一自治区から車で一時間ほど距離にある連合の海上基地があった。
停泊港が二つ用意され、大気圏内と圏外で滑走路が三本ずつ用意されたそこは目立った建物は少なく、大きな管制塔の周りを飛行艇や宇宙船が停泊するのみだった。
ただ海底には地下何百メートルに及ぶ軍事関係施設がタワー状に形成されていた。
「エッチな事考えてました？」
「……。お前の頭は軽くて良いなエミリア」
「ひっどい物言い」
「とりあえず、口を噤んでくれ少尉」
ゆっくりと下がっていく床。
視界を覆っていた隔壁が上がり、周囲の景色が広がっていくと、地下の施設がサングラス越しにデイズの目に映った。

――ゴゥン……。
格納庫全体に重たく響く駆動音。
フックに固定された巨大な人型の機械が、人やアンドロイドによって改修を受け、中央には巨大な飛行艇に運搬されているのが見えた。
第一層の格納庫。
人型の機械はどれも新しく、艶ややかな灰色装甲にはミルドレシア王家の印がマーキングされている。
「……新型のフォートギア、か」
「〈エルザ〉です。一年前からの導入です。……といっても中央本星ミルドレシアのおさがりなんですけどね」
「辺境警備の俺達じゃしかたないさ」
再び隔壁が視界を遮っていく。
窓越しに巨大なを機人を最後まで見つめていたデイズは、ふと運転席に座るエミリアに眉をひそめた。
「妙に用意がいいな」
「最近、トリフィア・ミルドレシア本星間で、小さな反政府組織がうろついているのを衛星基地で確認しているんです」
「――じじいに喧嘩売る……大した度胸だ、いればの話だが」
「真意はゴルド爺さんの胸の内って事で」
床はなおも下がり、やがて窓越しの景色に静かな街並みが混ざるようになってきた。
第二層の居住区画。
眼下に広がる、機械の天井をつりさげた巨大なジオフロント
中心にそびえる巨大な支柱を中心に円形に広がる街並みは、白を基調としたビルやマンションが連なり間を縫うように佇む木々が人口の風に揺れていた。
そんな一つの大きな街がすっぽりと海底施設に収まる様子に、デイズは肩をすぼめる。
「……じいさんは？」

「ここです」
「そうか……」
「会いたいですか？」
――会いたい、会って話がしたい。
そよ風に乗って耳に響く、か細い声。
感じるのは、小さな気配が二つ――
「――まぁな……」
僅かに背筋を走る熱っぽさ。
窓際に頬杖をつくと、デイズはうんざりしたようにそう呟くと、けだるげに窓の景色から目を背けた。
ガコンッ……。
エレベーターの床は止まり、車は再び居住区へ走り始める。
車は道なりに進むままに、巨大な中央エレベーターから程なく離れた一軒の家にたどり着いた。
窓に映る景色が止まり、程なく車から這い出したデイズの前には、広い庭に囲まれた豪邸が聳え立つ。
人が十人ほど住めそうなほどの三階建の家屋。
青々と広がる庭の奥にはプールが佇み、生やした木々が風に揺れていた。
「……ったく、豪勢しやがって」
厭味ったらしいほどの豪華な家を前に、捨て台詞を吐きながら、デイズは目の前の家の門扉をくぐった。
「じいさん、いるかい？」
ドンドンと叩く音が周囲に響き、程なくして目の前の扉がソロリと開いた。
――キョトンとした大きな瞳。
ギィと音を立て開く扉の隙間から覗く小さな人影。
長いブロンドを風に靡かせながら、そこには色白の少女は不思議そうに立ち尽くすデイズを見上げていた。
およそ見下ろさなければ見えない程の背丈。

澄んだ蒼い瞳は、サングラスを外し訝しげに眉をひそめる褐色の男を映す。
唇は惚けたように少し開いたまま、少女は開いたドアの隙間から不思議そうに褐色の大男の顔を覗き込んでいた。
「……」
立ち込める無言。
少女はドアの隙間からこちらを見つめるばかりで微動だにせず、デイズは気まずそうに首をすぼめた。
「あー……じいさんは……？」
「――デイズ……」
ほんのりと呟く唇。
頬が微かに血の気を帯び、怪訝そうに首を傾げるデイズを尻目に少女は恥ずかしそうに首をすぼめた。
「あぅ、おじいちゃん……呼んできますので……待ってて、ください」
「おう……」
戸惑うデイズを尻目に、少女はスッと顔を引っ込めると扉をバタンと閉めた。
トトトトッ
扉の向こうから聞こえる、早い足取りに、デイズはサングラスを胸ポケットに引っかけながら首を傾げる。
「……エミリア」
「ほいさ」
「ゴルドのじじいに孫なんていたか？」
「年が年ですし、いてもおかしくないんじゃないですか？」
「……。いや、今まで見た事もない――」
――チリッと頭をよぎる感覚。
「……。いても、おかしくないな」
「？」
「なんでもない……」

微かに頭の裏を掠める熱っぽさに、デイズは首をすぼめるとため息交じりにクシャクシャと髪をかきあげた。
そして手持無沙汰に扉の前で待つ事五分。
ガチャリ
玄関の扉が開き、顔を出すのは先ほどと変わってごつい黒服の男。
黒いサングラス越しに舐めまわす様にデイズの姿を見つめると、男は大きな手をデイズに突き出した。
「規則ですので」
「なくすなよ。高いんだから」
言われるままにデイズは腰に下げていた拳銃を差しだすと、黒服の男たちはスッと中に入るように促す。
デイズは誘われるままに玄関の戸をくぐると、後ろで立つエミリアを横目に手を振った。
「じゃ、後でな」
「はいっ」
扉は閉まり、黒服の男たちにつき添われるままに、デイズは豪邸の中を歩いていく。
玄関から伸びる階段を七段上った先の長い廊下の角。
長い道のりを経て、応接間まで案内された先に、老人が一人ソファーに座りこちらを嬉しそうに見上げていた。
「久しいの……デイズ・オークス」
ゴルド・ミルドレシア。
現在の銀河連合を束ねるミルドレシア王家の一人にして、トリフィア星系域の監督と自治を任された男であった。
「死んでねぇでやんの……」
顔中のしわを寄せ嬉しそうに微笑む老人の姿に、デイズは応接間の入り口をくぐりながらうんざりとした表情を滲ませた。
その言葉に老人は更に笑みを滲ませ、肩を震わせながら笑い声を噛みしめる。
「いいではないか。ワシももう少し生きたいのじゃよ」

「隠居しろよ。未だに准将様らしいじゃないの、じいさん」
「地位があって初めてなしうる事がある。しがみついているわけでもないのじゃよ」
「嘘くせぇ……」
そう言ってため息をつきながら向かいに座る褐色の中年男に、老人、ゴルドは懐かしむように目を細める。
「二年前、軍から放り出した時から、変わっておらんの。お前は」
「お互いさまだ」
「減らず口も相変わらずだの」
「世間話するために俺を無職にしたわけじゃないだろ……」
「だとしたら？」
「あんたのその小ずるい物言いが嫌いだ……」
そう言って天を仰ぐように仰け反るデイズに、ゴルド老は至極楽しそうに肩を震わせながら、胸元に手を這わせた。
「まぁ……あれじゃよ。お前の手が必要になったんじゃ」
古臭いタバコをくわえると、ゴルドはうすら笑いを滲ませながらデイズとの間にある机に手を伸ばした。
「デイズ。ザール機関は知っておるかの？」
カパリと開くテーブルの表面。
隙間からライターを取り出しタバコを炙る老人の横目に、デイズは頬杖をつき手持無沙汰に応接間を見渡した。
「ザール未開発技術及び能力研究機関……。銀河連合の一機関で、とりあえず自分たちが持っていない能力を宇宙の中から発掘する、政府公認の海賊」
「良い認識じゃ」
「――タバコはやめろ。鼻がもげる」
「いや」
紫煙をくゆらせながら、顎髭をさする老人に、デイズは眉をひそめながらも前のめりに顔を近づけた。
「で、それがなんだ」

「一年前かの、ザール機関の一研究所を発見したんじゃ」
「……まるで連中が隠れているかのような物言いだな」
「隠れてるんじゃよ」
「……」
「銀河連合がどれほどの規模になったか、お前さんは知っているか？」
「銀河二つを包む――ぐらいの認識かね」
「それほど大きな組織じゃ。我々組織の末端が、その他の末端組織を把握しきれんのは無理ない事じゃよ」
「中央からの自治が効かないとか、半分無法地帯じゃないか……」
呆れて顔をしかめるデイズに、ゴルドは煙草を口から離しながら苦笑いを呈す。
「まぁ……だからワシらも向こうも自由にやれる。だから、独自の技術と文化が生まれ、面白いものも見つけた」
「何見つけたんだ？」
「なんじゃと思う？」
――引きつる口元。
ムッと眉をひそめる褐色の男を、しわがれた目で真っ直ぐ見詰め、老人はぽつりと言葉を口にした。
「……リンケージ・チルドレン」
「……」
「自身も深く関わった過去じゃ……覚えておるかの？」
「――他者の意識と知覚と繋がる子供たち」
「それは人のみに及ばず、空間、時間、あらゆる自ら以外の存在と繋がり意識を広げる子供たち。
その力は特異点を発生させ、ありとあらゆるものに『現象』として作用する」
「……おかしいな。リンケージ能力は、ガリエアの大戦でミオとアリシアが見せた以外、外に情報を漏らしていないだろ
それ以前は、本星から一言もこの力について言及はなかったはず」

「中央からの自治はなくとも、情報のやり取りはあったとみるべきかの」
「……胸糞悪い」
吐き捨てるような言葉と共に、肺から空気を全部吐き出さんばかりに、デイズはため息を吐き眉間をきつく抑えた。
目を閉じれば、瞼の裏をよぎる金髪の少女の瞳。
少しおびえた少女が記憶の海に浮かび、デイズは目を開くと、顔色一つ変えない老人を睨みつけるように見つめた。
「……それがあの子か？」
「さっき会ったようじゃの。ちょっと無理言ってこっちで引き取らせてもらったのじゃよ」
「……」
「さて、本題に入ろうかの」
テーブルの上に置かれた灰皿に煙草を押しつけると、老人は表情をやや強張らせデイズに改めて向き合った。
「デイズ・オークス、元連合軍強襲暗殺部隊隊長。貴殿には再び軍に戻っていただきたい」
「……」
「そして、ワシの下で再び働いてもらいたい」
「……考える暇、くれないみたいだな」
「――何の為にお前を無職にしたのじゃよ。切羽詰まっているのはワシもお前も一緒じゃよ」
強張った表情を再び綻ばせながら、あっけらかんとそう告げるゴルドに、デイズはムッとした表情はそのままに、小さく首を振った。
「……仕事の内容を教えてくれ。でないとサインもできん」
「ほいさほいさ」
そう言って指を鳴らす音が応接間中に広がる。
途端に応接間の窓は、轟音とともに分厚いシャッターが掛けられ、薄暗い部屋の壁壁に割れ目が走った。
そして鏡開きになった壁の向こうには、立体モニターが浮かび、

映像が映し出される。
「うむ。大成功じゃ」
「……じいさん暇なわけ？」
「何を言う。今日の為にセッティングしたのじゃぞ」
そう言いながらニヤニヤと口の端をゆがめる老人に、肩を深く落としながら、デイズは頬杖をついてモニターを覗きこんだ。
そこには巨大な船の立体像が映し出されていた。
流線形の滑らかなフォルム。
丸みを帯びた船体には砲台が搭載されておらず、前方甲板の入り口から〈機人〉が出入りするのがわかるのみである。
後方には同じく格納庫からの出入り口があり、大型の推進口は僅かに三つと少なめ。
船というよりは、美術品に近い――デイズはぼんやりと目の前の立体映像を見つめながらゴルドに尋ねた。
「じじい……こんなポンコツどうする気だよ」
「立派な戦闘艦じゃろ」
「話がまるで噛み合っていないんだが……」
「この子は〈アストライア〉と言うんじゃ。外観はこんなものじゃが、火器はほぼすべて内蔵してある」
「装甲が薄くなって落ちるぞ」
「落ちんよ」
自信たっぷりに告げる老人の言葉に、うすら寒さを覚え、デイズは眉をひそめるままにゴルドから目を背ける。
「……これに乗れと？」
「そうじゃ。実物は後で見せるが、お前にはこれからワシの単独強襲艦〈アストライア〉のクルーになってもらう」
「ただソレ言うためだけに？」
「おまけもつけよう。三つほどな」
「……背筋がゾッとするプレゼントだ」
深いため息とともに、シートに身体を埋めるデイズを横目に、ゴ

ルドは苦笑いを滲ませつつ再び指を鳴らした。
呼応するように映像は戦艦から姿を変え、やがて大柄な機械の人形が紅く細めた瞳に映し出された。
同じくすらりとしたフォルム。
薄型のスラスターベーンが脚部と背部に取り付けられ、頭部には二つ目の紅いアイカメラ。
武器マウント部分は両肩と腰の三か所のみが見受けられるのみ。
同じくとても戦闘用とは思えず――
「……何、美術館にでも提出するつもり？」
「型番号ＧＡ―ＳＳ―５７と言ったところかの。今こっちに実戦配備されている〈エルザ〉の三世代後の機体じゃ。
この映像は素体じゃ。実物は同じく後ほどということで」
「どこから持ってきったんだよ……」
「実験運用としてこちらに回ってきたんでな、ついでに本星から借りパクしてきちゃった」
「――あっそ……」
ため息すら出ず、ガクリと項垂れるデイズを横目に、ゴルドは至極嬉しそうに機体の説明に入る。
「この子はの、エンジンに高圧縮のグラビティクラスター・エネルギーファンクションを搭載しているんじゃ。それらを保持するために特殊な斥力素材も各所に積んでおる」
「ブラックホール機関……大型の戦闘艦にしか積んでないと思ったが」
「今やフォートギア、機人は船を超える程のエネルギーを得たというわけじゃな」
「重力機関は非常に制御が難しいと聞くが……」
「本星の連中からもそう言われたわい。今回の実験運用テストも、こちらを捨て駒と考えてのことだからな」
そう言いながら嬉しそうに目を細める老人の横顔に、デイズはハッと目を丸くするままに立ちあがった。

「まさか……」
「機体の操縦には、卓越した技術力と勘が必要になる。そしてシステムの制御にはワシには推し量れない力が必要になる。
そう、リンケージチルドレンの力が必要になる」
「……子供にフォートギアに乗れと」
「――正解じゃ」
ニィと口の端をゆがめる老人の横顔を睨むように、デイズは薄暗い闇の中険しい表情で立ち尽す。
「……じいさん」
「今更、人道的ではない、と考えるか？」
せせら笑うようにこちらを見上げる老人に、褐色の男は固めた拳を震わせにじり寄ろうとした。
「――俺はあんたほど、手を血で汚したつもりはない」
「あの子たちの才能はいずれ宇宙全体に必要になる」
「リンケージチルドレンなんて肩書きはもう廃れてしかるべきだ」
「本星では――そう考えておらんようじゃ」
――先ほどの言葉が、頭によぎる。
デイズはムッと顔をしかめると、振り上げた拳を下ろす様に、わなないた背中を丸めソファーに身体を埋めた。
「ワシも、あの子たちをザール機関から拾い上げた時は絶句したよ」
「……連合はリンケージチルドレンの力を有用だと考えている、か」
「あまり好ましくない方向にの」
目を閉じるままに、老人は少し声を震わせながら、語り始める。
「これはワシの一つの目標じゃ。……宇宙を翔けるなかで、お前達自身でいかように変えても構わん。
されど、争いのない場所に子どもたちを逃がしても、連合が手を伸ばす事は必至じゃ」
「……」
「そうなれば、今より遥かに劣った環境が子供たちを待つだろう」
「――そうならないために、リンケージチルドレンの地位を上げる、

か」
「幸い、ここには五年前のガリエア星系で多大な戦績を上げた英雄のひとりがここにおる。子供たちが共に戦績を上げ、宇宙にその地位を確立するのにさほど時間はかからん」
「大衆に晒されて、見世物にされるか。或いは場所を自分でばらすだけになるかもしれない」
そう言って戸惑いに項垂れるデイズに、向き合い、ゴルドは小さく頭を下げた。
「そうならんために……ワシはお前も力が必要なんじゃ」
「……あんたの目的は、ザール機関か」
「そうじゃ」
デイズは観念したように深いため息を漏らすと、立体映像に映る機人を見つめながら頬杖をついた。
「火中に栗を拾う、か――」
「或いは、脱兎のごとく逃げ出すか」
「……これに乗って、戦えばいいのか？」
「コードネーム〈アトラシア〉。……二人乗りの機体でな。お前と子供たちの二人で操縦してもらう」
「……俺は優しくないぞ」
そう言いながら、憂いに満ちた表情を浮かべるデイズを横目にゴルドは嬉しそうに肩を震わせた。
「嘘をつくのは、相変わらず下手じゃな」
「……」
「〈アストライア〉はおよそ七名のブリッジクルーと一人のリンケージチルドレンで動く強襲艦じゃ。合わせて二人。
お前には、計三人の子供たちと共にワシの下で働いてもらいたい」
「……。計算が合わんのだが」
頭に疑問符を浮かべるデイズを横目に、ゴルドはパチンと指を鳴らし立ち上がった。
ガシャンッ

窓を塞いでいた金属のシャッターが一斉に登り、窓から差し込む淡い光に目を細め、老人は両手を叩いた。
「エリス、マナ。入ってきなさい」
その言葉に、キィと音を立てて開く応接間の入り口。
窓から零れる眩さに眉間を押さえながら、デイズは立ち上がると入ってくる人影に目を見開いた。
「紹介しようかの。エリス・バークライトじゃ。十一歳ながら強い接続能力を持っておる子じゃ」
ゴルドの紹介に、紅く染まる頬。
長い金髪を垂らし、俯きがちにギュッと胸元を押さえながら、少女は恐る恐るデイズの顔を覗き込む。
握れば折れそうなほど華奢な手足。
潤んだ蒼い瞳は、戸惑うデイズは真っ直ぐに映し、腹ぐらいしかない背丈は、白い肌も相まってか人形と勘違いするほどだった。
震える唇は紅く、細い息を洩らしながら小さな声を鳴らす。
「……エリス……と言います」
「……お、おう」
サッと隠れる華奢な身体。
風を切らんばかりの迅速な動きは、素早くデイズの視線から身をひそめ、ギュッと影で身体を丸める。
「……」
「エリスぅ。隠れちゃだめだよぉ……」
「マキナちゃん……ごめん」
「……。えっと、マキナ・トライスフェルだよ、デイズおじさんっ」
縮こまるエリスを横目に、照れくさそうに告げる少女は、同じ程の背丈の明るい少女だった。
髪は同じくブロンド、澄んだ灰色を帯びた目は興味深そうにデイズの顔を映す。
デイズは戸惑いながら、きょろきょろと首を傾げデイズの姿を舐めまわす様に見上るマキナに顔をしかめた。

「……珍しいか。こんなおっさんだが」
「――ふぅん。これがエリスの……」
「ん？」
「なんでもないよっ」
「……じいさん」
ニコニコと笑う少女、片や不安げにこちらを見上げる少女を横目に、デイズは苦い表情で老人を睨みつけた。
老人はというと、デイズにすり寄る二人を見つめながら満足げに頷いている。
「うんうん。相性がいいのは最初からわかってたがここまでいいとはの」
「……いやいやいや、なんか違う」
「デイズ。マキナはエリスと比べて力は劣るが、お前とは相性が良さそうじゃの」
「やっぱりこの話、なかった事に」
「お前もそう思うじゃろエリス」
――腰に走る強烈な痛み。
「ぐぇ！」
気がつけば前のめりに倒れる程の強烈なタックルに、デイズは目を丸くしてテーブルに突っ伏した。
ゴンッと額をぶつける鈍い音。
紅く滲んだ額を押さえながら、デイズは躊躇いがちに後ろを振り返ると――
「……いい、一撃だ」
「……」
ワイシャツに食い込む小さな指。
ギュゥとしがみつく小さな影が一つ。
デイズはよろよろと起き上がると、腰に抱きつくエリスを横目に苦い表情でゴルドに向き合った。
「……じいさん。マジか？」

「マジ」
「……」
「お前を信じてる子たちじゃよ。……お前が自分たちを救ってくれると」
「――選択した先に、あんたの信じる未来があると思うなよじじい」
「未来はお前達四人が決める事だ。わしにはもう未来がないからの」
「三人目どこよ」
「――度肝抜けるぞ？」
ニィと嗤う老人は再びパチンと指を鳴らした。
ガコンと上下に揺れる床。
フワリと浮かぶような感覚。
窓の外の景色が空へ向かって流れ始め、すぐに薄暗い隔壁に遮られてしまい、暗闇の中に機械の巨人が浮かぶ。
「連れて行ってやろうっ」
「じいさん、ホントに二年間暇だったんだな……」
苦い表情を浮かべるデイズの腰に顔を埋めるように、エリスはギュッとしがみつき、マキナは大きな褐色の手をギュッと両手で握る。
全身に重りが二つ乗っかる感覚に、デイズは苦い表情を滲ませ、しがみつく二人を見下ろす。
「……怖いか」
不安げにう俯いていたいたマキナは顔を上げ、照れくさそうにデイズを見上げる。
「――う、うん……少し」
「……行かないで」
ギュッと顔をワイシャツに埋めながらコクコクと頷くエリスを横目にデイズはため息交じりに天を仰ぐ。
「……何の因果だか」
ゴンッ
家全体が何か固いものにあたったかのような音が響き、やがて身体が浮くような感覚が消える。

窓の景色は未だ薄暗く、老人は立ち尽くすデイズに手招きしながら部屋を出た。
「来なさい。〈アストライア〉がお前を待っておるよ」
「……。じいさん、一人頼む」
「将来の嫁さんを邪険に扱っちゃいかんじゃろ、まったく」
「――――え？」
「……口が滑ったかの」
可笑しそうに肩を震わせて部屋を出ていく老人の背中を見つめながら、デイズは氷のように立ち尽くす。
息をするのも忘れるほど、立ち尽くす事一分。
「おじさん、大丈夫？」
「…デイ…ズ？」
心配そうに両手を引っ張るエリスとマキナに起こされた思考が、即座にゴルドの言葉を処理する。
（……気のせいだな。ああ、気のせいだろうな）
それでも吹き出る大量の汗。
眉間を押さえたくなるほどの痛みが頭の裏を襲い、デイズは歯ぎしりを滲ませながら軽く首を振った。
と、クイクイッと腕を引っ張られる感覚。
顔を上げると、そこには既に応接間を出ようと歩き出すエリスとマキナの姿があった。
「デイズ……さん」
「いこっ、おじさん」
二人に引っ張られるままに、デイズは戸惑いがちによろよろと歩きだし、応接間から引きずり出された。
そして廊下を抜け、一階の玄関前へと躍り出ると、そこには入り口に立つ二人の黒服。
そして差しだされる大型の拳銃。
デイズは二人の手を離すと、腰のベルトに差し込むままに胸ポケットからサングラスを取り出した。

「……さて、何が出るやら」
サングラスで視界が薄暗くなり、デイズは邸宅の玄関の扉を開いた。

3話目

――大きく開けた空間。
周囲に会った建物は真っ平らな機械の床に置き換わり、奥には停泊用のドッグが設置され海水が注水されていた。
そしてその水面すれすれに、漂うように浮かんでいた巨大な船があった。
滑らかな、まるで継ぎ目のない装甲。
武装は取り付けておらず、前方には滑走路が二本設置されているのみ。
雪のように白い装甲はライトの灯りを照り返し、長い流線型の身体が、街二つが入るくらいのドッグに横たわっていた。
「金掛けやがって……美術品じゃないか」
背部の噴射口から零れる出す光の粒子。
底部には搬入口が開き、数体のフォートギアが出入りしているのが見え、デイズは呆れた面持ちで歩み寄った。
ガシャリ
床に深く踏み込む巨大な両脚。
巨大なコンテナを担ぎながら歩く巨人は、不意に手を振る褐色肌の男に二つ目を向け立ち止まった。
『あれ、隊長じゃないですか？』
少し若い青年の声が、フォートギア越しに響いてくる。
デイズは不意に立ち止まるままに、緩慢な動作で片膝をつき目の前に跪く巨人に目を丸くした。
「……ライアスか」
『ははは、いやな顔しないで下さいよ』
胸のハッチが開いてヌゥと顔を覗かせる人影。
興味深そうに見上げるマキナをよそに、エリスはビクリと背中を震わせ慌ててデイズの腰に顔を埋める。

「……えと……誰でしょうか」
「ん。元独立強襲暗殺部隊所属、ライアス・ホーネス少尉。俺の部下だよ」
「……友達、ですか？」
「――かもな」
その言葉に、恐怖が和らいだのか、恐る恐る顔を出すエリスの頭を撫でると、デイズは浅黒いスーツを着た男に手を振った。
「元気してたか？　ライアス」
「ええっ。もちろんです」
フォートギアが担いでいたコンテナの上を跳ねるように飛ぶと、そう言って男はデイズの前に飛び降りた。
頭のヘッドバイザーを外し、息苦しそうに首を振りながら、男はデイズにやや幼い笑顔を見せる。
「本当に……お久しぶりです隊長」
「とりあえず挨拶してやれ」
そう言って肩をすくめるデイズに、黒髪の青年はキョトンと目を丸くして、こちらを見上げる少女二人に目を配った。
二人とも年端のいかない子ども。
どちらもデイズにすり寄っている様子で、男は目を丸くしたまま、少女二人とデイズを見比べる。
「……どうしたんですか？　これ」
「じじいの隠し子」
「嘘だと思えないから困ります……」
「リンケージチルドレンだよ……お前も聞かされていないのか」
「僕も先日こっちに配属されたばかりで、すいません」
「いいさ――ほら、ライアスに一発蹴りいれてやれ」
「なんで！？」
「挨拶だよ」
ギョッとする男を横目に、デイズはニヤニヤしながら、キョトンとする二人をグッと前に押し出した。

マキナは目を丸くしながら、戸惑う男の全身を舐めまわすかのように見つめる。
まるで、どこを蹴ろうか迷うかのように――
「……いいの？」
「思いっきり」
――股間に照準が合う。
「……マキナ・トライスフェルですっ」
電撃が走ったかのようだった。
食い込む飛び膝蹴りに、男はクワッと目を剥き無言のまま腹を押さえ、決を突き出す様にその場にうずくまる。
「ひ……ひどぅい……」
「手加減を知らない事は良い事だ。……エリス」
ビクビクと痙攣する男を横目に、デイズはたじろぐエリスの背中をそっと押した。
エリスはハッと目を丸くすると、戸惑いながら隣に立つ褐色の男を見つめる。
何か言いたげに少し震える唇。
蒼く澄んだその目は少し不安におびえていて、デイズは少し困ったような笑みを滲ませ、頭を撫でた。
「……できるか？エリス」
「――こ、怖いです……」
「俺の手に触るのもか？」
「……」
「言ったろう。挨拶みたいなもんさ。その不安な気持ち、一気に吹き飛ばしてみろ」
「デイズ……」
「上官からの命令だ。……気にせずやってみろ」
「――うんっ」
「いい子だ……」
少し引き締まる幼い頬。

ニヤリと笑うデイズの横顔を見つめコクリと頷くと、エリスは少し高ぶる胸を押さえながら歩き出した。
そしてうずくまる男に見下ろし、エリスは胸を押さえながら大きく息を吐く。
グッと足のつま先に力を込める――
「エ……エリス……バークライトって言います！」
ドッグに大きく響き渡る甲高い声。
「よろしくお願いしますです！」
グニュッと食い込むつま先は僅かに男のわき腹に食い込み、程なくスーツの弾力に跳ね返された。
蹲っていた男の痙攣が止まり、エリスは顔を真っ赤にしながら俯きがちに後ずさる。
「えと……よろしくお願いします……はい」
「ああん……じらしプレイ……」
「じゃ、最後に俺だな」
「ええええええええええ！」
カンカンッ。
細長い金属棒が地面を叩く気味い音。
どこからともなく持ってきたバッドで肩を軽く叩きながら、デイズは緩慢な足取りで男の下へ歩み寄る。
「一応聞こうか。貴殿の階級を」
「え……あ。ライアス・ホーネス、階級少尉、好きな食べ物は熟女物です！」
「エディオールも言ったろう。そんなものに頼るなと」
「ちょっと待って！　股間のダメージがまだ消えてなくて動けないんですぅううう！」
ピタピタと金属棒が横向きに、男の穴にゆっくりと押し当てられる。
ヒュンッ
切っ先を振り上げ、空気を鋭く切る音が聞こえる――

「元独立強襲暗殺部隊所属、デイズ・オークスだ。よろしく」
「や、優しく……」
「いや」
――つんざく爆音。
地面が揺れんばかりの咆哮がドック全体を包み、ソレと共に枯れた悲鳴が辺りを包みこんだ。
ガクリ……。
ケツを天に突き上げたまま崩れ落ちる男、ライアス・ホーネスを横目に、デイズはエリスとマキナに微笑む。
「ま、こんな男でも俺の部下でな。よろしくな」
「き……気持ちいい……」
「今度汚ねぇ言葉喋ったらケツに棒突っ込んでやる」
動かなくなるライアスを横目に、キョトンとする二人の頭をなでるとデイズは再びドック内を見渡した。
ガシャリ、ガシャリ。
ドックの隔壁が開き、奥から二体目のフォートギアが顔を出した。
機人はライアスが乗っていた物と同じく〈エルザ〉で、背中にコンテナを背負いながらこちらへと歩いてきている。
と、立ち尽くす三人を横切りながら、小さく巨人は手を振る。
そして船の搬入口へと入る機人に、デイズは懐かしそうに笑みを零すと、エリスとマキナを促した。
「じゃあ、俺達も入るか」
「……あの人は？」
興味深そうに背伸びをしていたエリスに、デイズはサングラスを外し、懐かしむように目を細めた。
「エディオール・ラインドット。ゴルドのじいさん同い年だが、一応の俺の部下だった連中だ」
「おじいちゃんと……」
「お目付役だったのさ。俺が危うい事をせんようにな」
苦笑いを滲ませそう言いながら、痙攣するライアスのわき腹を軽

く小突いて立ち上がらせた。
「ライアス。じじいは？」
「ぶ、ブリッジ。……艦長と会ってるんじゃないですかねぇ……」
そう言って腹を押さえつつ立ち上がるライアスを横目に、デイズはエリスとマキナを連れて搬入口へと足を踏み入れる。
「誰だよ？」
「実際に見た方が――隊長……泣くんじゃないですか？」
「いやな人選になりそうだ……」
ヘッドバイザーを再び被るライアスを横目に、デイズは二人を手招きして搬入口から格納庫へと入った。
広々とした空間。
固定用のハンガーがいくつも天井ぶら下がり、壁にはフォートギアを格納するためのスペースが設けられていた。
既に二機の〈エルザ〉がハンガーに固定されながら壁に張り付き、その脇にはいくつものライフルベースの兵装が用意されていた。
そして格納庫の遥か奥。
ひと際目立たない所に安置されていたのは、〈エルザ〉の規格を少し大きくした、白い装甲の巨人だった。
白を基調とした装甲には傷一つなく、光の粒子が表面を包む。
動物のような頭は、鼻のマズルが大きく突き出し、白い兜の中から長い牙が見え、蒸気が鼻先から洩れる。
ピンと伸びた長い耳のようなセンサーが、ヒクリと動く。
頭には二つの目が俯いたまま、四つの爪の伸びた自らの足先を見つめる。
僅かに肩を上下させながら、歩み寄る三人の姿をじっと見つめる――
「わぁ……ワンワンみたいだね、エリス」
「うん……なんだか格好いい」
「〈アトラシア〉……いい趣味してるわ。ったく」
二人の惚けた声をよそに、デイズは至極苦い表情で、この白い鎧

を着込んだ巨大な獣を睨みつけていた。
カツンカツン……。
と、足音がこちらへと近づいてきていて、デイズは恨めしげに目を細めて振り返る。
そして、近づく影を捉えては、更に気が重くなる――
「おひさ」
「……なるほど。お前か」
少し汚れた白衣を着た女性は格納庫の入り口から顔を出すと、デイズに手を振りあ読み寄ってきた。
長い黒髪は後ろ手に縛り、ずれたメガネを直しながら顔をそむける中年男に歩み寄る。
「元気してた？デイズ」
そう言って顔を近づける女に、デイズは共に気まずそうに頭を掻くと顔をそむけようとした。
クイッ
袖を引っ張られる感覚に、デイズはホッとしたような気持ちと共にエリスを見下ろそうとする。
「ああ。なん――」
――漂うオーラ。
今にも噛みつかんばかりにジロリと睨むエリスに、デイズは更に気まずそうに苦笑いを浮かべた。
「……以外と覇気があるな」
「あはは……えっと、この女の人は誰なのおじさん」
ムスッと頬を膨らませるエリスを押さえるマキナに、デイズは嬉しそうに目を細める黒髪の女性を指差した。
「……元独立強襲暗殺部隊。アリシア・ミルドレシア。俺の部下だ」
「あなたたちと同じく、元リンケージチルドレンよ」
そう言って背中から抱きつく白衣の女。
背筋がゾワゾワと逆立ち、デイズは顔を引きつらせすり寄るアリシアを振りほどこうと身体をよじった。

「……てめぇか俺を呼んだのは」
「イエスっ」
「くそっ……このフォートギアといい名前といい、いい趣味してるわ……」
「でしょっ。最高の名前を付けたつもりだけど」
「最悪だ……」
その言葉に、アリシアは笑顔を崩さずぐりぐりとデイズの背中に顔を押し付ける。
「いい匂い……久しぶりだから心が躍るわぁ……」
「離れてくれ……頼むから」
そう言ってデイズは背中に張り付くアリシアを振りほどくと、肩の埃を払いながらうんざりした表情を浮かべた。
そして紅く細めた双眸は、アリシアから視線を外し、格納庫の入り口を睨む。
「……じじい。これは一体何の真似だ」
コツコツと広い空間に響く二つの足音。
恨めしげに注がれる視線に、格納庫の隅から顔を出したゴルドは怖々と首をすくめ、自らの手元を見下ろした。
「怖い怖い。……のぉ、ミカ」
「……」
隣には、フルフルと長い黒髪を横に振る少女。
老人のしわがれた手にそっと背中を押され、少し硬い表情を浮かべながら、少女は恐る恐るデイズの前にやってきた。
じっと見つめる目は紅く、腰程にしかない背丈。
つま先立ちをしてに手をぐっと伸ばすると、デイズの強張った腕になんとか触れる程度で、少女は小さく首を振る。
少し唇が震える――
「……お父さん……」
「――三人目か」
諦めたように深いため息をつくデイズの言葉に頷くのはアリシア。

トトトッと駆け寄る少女を抱き寄せると、アリシアは嬉しそうに目を細め項垂れるデイズに告げる。
「うんっ。ミカ・ミルドレシア。エリス、マキナと同じくリンケージ能力者よ」
「……。お前いつ子ども作ったよ」
「大丈夫コピーだし」
「そう」
「でも遺伝子操作の関係上別の因子が欲しかったから、半分だけデイズの遺伝子を組み込んであるよ」
「えええええええええええ！」
格納庫に響き渡る断末魔。
サングラスが床に落ち、氷のように固まるデイズを横目に、アリシアはミカの頭を愛おしそうに撫でる。
「いい出来でしょ。あなたの遺伝子ファクターは本当にいいものだらけだからね」
「いつ俺の遺伝子取った！」
「あなたが孕ませようとしていたごみ箱から」
「――――」
「まぁ種族がそうなんだから仕方ないけど……ほどほどにねっ」
「……度肝抜けたわ……」
ニッコリと笑うアリシアに、口元が引きつる。
ミカは母親に頭を撫でなられながら、キョトンとしたまま目の前で呆然と立ち尽くす男の手を握る。
両手で分厚い褐色の手を揺すりながら、ぽつりと一言。
「……大丈夫？　お父さん……」
「童貞で子持ちとか……」
乾いた笑いを覚えながら、不安そうに覗きこむミカの頭を軽く撫でると、デイズはニコニコと笑うミルドへと振り返る。
「……爺さん」
「ダメじゃ」

二言目を遮ると、老人はエリスとマキナとミカの三人を手招きするままに、傍に侍らせた。
「デイズ。……わかるか？」
三つの視線が、苦い表情の中年男を見つめる。
一つは期待に満ちた視線。
一つは喜びに満ちた視線。
一つは緊張に強張る視線。
「この子たちはお前を必要としている。……お前しかおらんのじゃよ」
「……アリシアでいいだろ」
「性格が破綻した娘に育児をさせろと？ワシは少なくともこの三人をこの二年間、あの女に世話させた事はないぞ？」
恨めしげに振り返るデイズを横目に、アリシアは小走りで白い鎧を着た狼の巨人の下へと駆け寄っていった。
老人は頬をすり寄らせるアリシアに苦笑いを滲ませると、三人を見下ろす。
「お前は、この子たちは気に入らんか？」
「……」
「いやならライアスあたりに充てがってやるが」
「――反吐が出そうだ」
「くくっ、良い返事だ」
口を尖らせるデイズに零れる、引きつった笑い。
トンッとゴルド老に押されるままに、三人は恐る恐る難しい表情を浮かべるデイズの下へと歩み寄った。
「……お父さん」そう言ってミカはデイズの右腕にしがみつく。
「よろしくねっ、デイズおじさんっ」満面の笑みを浮かべてマキナはデイズの左腕にしがみつく。
そして、エリスはたじろぐデイズの腰に顔を埋めグリグリと頬を擦りつける。
「……デイズ……あの、よろしくお願いします」

「……期待するほど、俺は良い大人じゃないぞ？」
「知ってます……でも大丈夫、だと思いますから」
「……勝手にしろよ」
ため息交じりで呟くデイズに、エリスは緊張気味に頷いてデイズにしがみつく。
爪が引っ掛かり皺の浮かぶシャツ。。
重しがのっかかったかのように両腕が重たく、デイズは戸惑いがちに顔をしかめニヤニヤと笑う老人を睨む。
「……あんたは俺達に何をさせようと言うんだ？」
「何も」
「……」
「その子達は研究所から引っ張ってきた。ザールはそう遠からぬうちに顔を出すじゃろ」
「殺しをするのに子どもは邪魔だとは言わない……」
「――お前がワシの下で働き始めてから今まで何をしてきたか、この子たちにはよく教えたよ。
何人殺したか。どうやって殺したか」
腰に差した銃を指差す老人に、デイズはムッとした表情はそのままに足元のサングラスを拾い上げる。
「その時、お前はどんな表情をしていたか」
サングラスをかけるデイズの表情を覗きながら、老人は嬉しそうにそう語る。
「――知りうる事は全て教えた。そのうえで、その子達はお前の手を取ると言った」
「……」
「三人とも、お前に会いたいとな」
「……ザール機関の連中をこの船で潰せばいいわけだな」
「そう。ワシの御旗の下でな」
踵を返し背中を見せるデイズを見上げながら、ゴルド老は力強く頷いた。

「いずれ本星に返り咲き、ザール機関共々、必要なものを全てこちらに吸収する。技術、人員、システム、インフラ、都市機能。
必要なもの、宇宙全てが二千年繁栄するのに必要なものはすべて奪う」
「……でかい夢だ。死に掛けのじじいが見るには少し大き過ぎるがな」
「お前達がいれば可能だ。五年とかからんよ」
「……」
「そして、全てが終われば、お前に全てを渡したいと思う」
「俺も結構年を取ったんだがな」
「いやだとは言わせんぞ、デイズ・オークス」
「……夢は寝てる時だけにしてくれ」
そう言ってデイズはおどけたように肩をすくめるとポケットに手を突っ込み、ＰＤＡを取り出す。
「……俺だ。仕事が決まってな、引っ越しの手続きを始めたい」
「誰と話してるのおじさん？」
「うちのメイドさん。……ああとりあえずそっちに戻るよ。持っていく道具や服を決めないとな」
興味深そうにＰＤＡを覗くマキナの頭を押さえるように撫でながら、デイズはそう言って口元に笑みを見せた。
エリスはそんな二人の様子を離れたところからみながら。頬をムゥと膨らませる。
「……デイズっ」
甲高い嬌声に、デイズは眉を動かすと、腰にしがみつくマキナを引きずりながらむくれるエリスに振り返った。
「家はそのままだ――あいよっ。なんだいお姫様」
「私も……構ってくださいっ」
「素直な子は好きだ……」
「え……」
「来いよ」

零れる苦笑い。
小さく手招きされ、エリスはハッとなって顔を赤くすると、躊躇いがちに小走りでデイズの下へと駆けこもうとした。
ドンッ
突き飛ばされるままに宙に投げ出される華奢な体。
エリスはビタンと床に突っ伏すと、紅く腫れた鼻を押さえながら涙を浮かべよろよろと顔を上げる。
「い……いたい……」
――覗かせる小さな舌。
「……べぇ」
「――――」
「……お父さんは……ミカの」
デイズの身体に同じくしがみつくミカに、真っ赤に頬を膨らませたエリスの長い金髪が逆立った。
バチリッ
激しい火花を上げて、大きく捩じれる空間。
零れた涙の滴が宙に浮かび、波打つ景色を背に、エリスは目尻を擦りながらしゃくり泣きをはじめる。
「――――ミカちゃんの……バカぁ……私だって」
「エリス。早く来いよ」
「……」
「それとも俺の話は聞けないか？」
フルフルと長い髪が左右に揺れ、俯きながらエリスはトボトボと立ち上がり小走りにデイズの下へと駆け寄る。
ボフッとシャツに埋もれる小さな肩。
捩じれていた景色が元に戻り、デイズは微笑を浮かべシャツに顔を埋めるエリスの金髪を優しく撫でた。
「いい子だ」
「うう、ごめんなさい、デイズ……」
「気にするなよ……ああ、写真はそっちに置いていてくれ」

三人にまとわりつかれながら、デイズは困ったような笑みを滲ませ、ＰＤＡ越しにロボットに指示を出していた。
そんな様子を遠くから見つめながら、老人は嬉しそうな表情でアゴ髭をさする。
「ねぇ」
と、少し不機嫌な声に老人は眉を動かすと、にじり寄るアリシアに口元を歪める。
「バカ娘がワシに何の用じゃ」
「あれでいいの？」
指差す先には、三人の少女に身体を引っ張られながら、ＰＤＡを片手に通信をする中年男の姿。
困った様子で肩をすぼめる男を睨み続ける娘を横目に、ゴルドはフンッと鼻を鳴らす。
「艦の製造からフォートギアの調達まで全て金を出したんじゃぞ。これ以上文句を言う気か？」
「もちもち」
「がめつい――以前のお前以上には、相性は良さそうじゃろ」
老人が指差すと、アリシアは白衣のポケットに手を突っ込みながら、アリシアは不満げに口を尖らせた。
「どう思う？」
「科学者の見地から見ると、〈アトラシア〉を起動させるのには、三人とも不具合はないかもね。
もち、実践テストをしないとわかんないけど」
そう言って鋭く目を細めながら、格納庫の奥に佇む狼の巨人を睨んでは、アリシアはくしゃくしゃと黒髪を掻く。
「ただ……個体差はあるかもね。三人ともデイズとの感応性が調べられたわけじゃないですし。
なんにせよこれから、かな」
「一人の女としては？」
「あなたの首を今すぐ引きちぎって海に投げ捨てたいわ」

翻す白衣。
ひらひらと肩越しに手を振って格納庫を後にする娘を横目に、ゴルドは肩を震わせおかしそうに笑った。
「くくくっ、怖い怖い……」
ガシャン、ガシャンとフォートギアの足音が響く格納庫の中、老人の笑い声が、目の前でじゃれあう中年男と三人の少女の声にかき消される。
「ねぇおじさんって何歳っ。彼女とか何人できた？」
「マキナ、首にしがみつくな……32だ」
「とてもそうには見えません……すごく若く見えますデイズっ」
「お世辞でも嬉しいよエリス……」
「――ストライクゾーンは何歳から……？」
「うちのライアスよりは、広いつもりだ……アイツは10歳辺りからって言ってたからな」
「うっわ……ちょっと引くかも」
「3人とも、今日からあいつの事はゴミクズって呼んでやれよ。渾名がないのは可哀想だからな」
『はぁい！』
力一杯に手を上げ、またデイズにじゃれつく3人を見つめながら、老人は痛む腰に手を当てた。
そして視線を動かし、見上げる先には白い巨人。
滑らかな鎧をまとい、片膝を立てて佇む姿は狼の頭を模していても、足元で戯れる主人の従者の様に、静かに首を垂れる。
黒い心臓を胸に宿しながら、紅いアイサイトを優しくデイズへと向ける――
「――頼むぞ、デイズ」
フォートギアの足音響く格納庫に掻き消える言葉。
項垂れる白い巨人に小さく頭を下げて踵を返す老人に、巨人は徐に首を動かし、紅い目に老人の背中を映す。
グルルルゥ……。

身震いが装甲を伝い、白煙が僅かに口の間から漏れ出す。
まるで生きているかのように――

幕間：最初の朝／最後の朝

いつから感じていたのかはわからない。
気がつけば、私の中にあの人がいた。
はっきりと感じたのは五年前。でもそれ以前からあの人は、私の前にいた。
ずっと昔から、あの人が私の前に立ってサングラス越しに私を見る前からずっと私の中にあの人がいた。
前世――とかじゃないと思う。
でもぼんやりとその人がいた。
影を引きずる大きな背中、銀の髪を風に靡かせ、手はほんのりと紅く血の匂いが鼻につく。
鋭い眼光が空を向いていて、首輪がからからと揺れている。
ぽたりぽたりと血が滴って、ふと私の方を向く。
私を見つめる――
「エリスっ、おっきろぉお！」
「んにゃっ！」
マキナちゃんにベッドにダイブされて私は一気に目を覚ます。
身体を起こし周りを見渡せば、ゴルドおじいちゃんの家の、私の部屋で、マキナちゃんは私のベッドでごろごろしていた。
地下二層目の朝は変わらず晴れで、私はパジャマの裾で目を擦る。
「……ミカちゃんは？」
「アリシアのおばさんと一緒に調整行っちゃった。私たちはもう少しゆっくりしていていってぇ」

嬉しそうに頬を綻ばせながら、マキナちゃんはゴロゴロとする。
私と同じ長い金色の髪はもうひもで縛っていて、私はワサワサになった髪を指で梳きながら欠伸を噛みしめた。
そして、ベッド上で丸まるマキナに私は唇を開く。
「ねぇ……」
少しだけ、胸の音が高鳴る気がした。
「あの人……どこかな？」
「誰？」
ベッドのシーツに顔をうずめながら、マキナちゃんはどこか楽しそうに私の顔を見つめる。
いつもマキナちゃんは意地悪な言い方をする。
頬が一気に火照るのがわかって、私は口元をシーツで覆いながら、ちょっと恨めしげに唇を尖らせた。
「……デイズの事だよ」
「おじさん？　朝になったら迎えに来るってさっきおじいちゃんが言ってたよ」
「そうなの？」
「うにゅ」
「……そっかぁ」
肌の火照りが消えて、代わりに頬っぺたが少しだけ緩んだ気がした。
私はそんな顔をマキナちゃんにからかわれたくなくて、私は朝日の差し込む窓の方へと目を向けた。
街の様子は変わらなくて、相変わらず中央に柱が聳え立つお椀状の外観。
人口の風に揺れる木々。
日差しを照り返す真っ白な建物の群れ。
木々が揺れる様子も、白い街の風景も、見るのが最期かもしれないと思って、私は目を細めて窓の向こうを見つめる。
そして――

「今日からからおじさんとずっと一緒に行くんだから、これが最後かもねっ」
――意識を読まれる感覚。
私は耳まで顔を真っ赤にして振り返ると、慌ててベッドから飛び降りるマキナちゃんを睨みつけた。
「ま、マキナちゃん！」
「あはははっ、エリスは考えてる事すぐにわかるっ」
「よ、読んじゃダメぇえええ！」
バンバンと両手でシーツを叩く私をよそに、マキナちゃんはトトトッと小走りに私の部屋から出ていく。
「あと一時間ぐらいで来るってさっ。早く準備しよっ。予定が二時間も繰り上がったんだから」
「むぅ……」
膨らんだ頬っぺたを撫でながら、私は不満な気持ちをよそに床に足をそっと下ろす。
ヒタリ……
冷たい感触が足に伝わり、私が立ち上がるのがわかる。
一歩先には未来が広がる。
爪先に広がる未来。
その向こうには、あの人がいる気がする――
――行こうっ。
剥いだシーツが宙に舞い、私は少し大きめのパジャマを靡かせて床を蹴りあげた。
差し込む朝日に影が出来て、一緒に走ってくれるのが、私はとても心地よかった。

4話目

「……おせぇ」
黒のズボンが照り返り、零れるのは愚痴とため息。
スーツを肩にひっさげながら、デイズはぼんやりと車のドアにもたれかかるように立っていた。
目の前にはゴルド老の邸宅。
ささめく風に首輪を鳴らしながら、デイズはＰＤＡ片手に目を細め今か今かと苛立ちを覗かせ爪先で地面を叩く。
「……確か二十分前についたと連絡したよなエディオール」
「ええ」
軽く苛立つデイズを横目に、窓越しに運転席で頷く人影。
白くなった髪を掻き上げると、細身の初老の男は窓から顔を出し、項垂れるデイズの横顔に囁く。
「では呼んできますか？」
「焚きつけるのは、どうにもマナーがなってない気がする」
「律儀な人だ」
「やかましい……」
低い声で笑いを殺す男を横目に、デイズは苦虫をかみつぶした表情で鼻を鳴らし、そう呻いた。
その言葉に男は更に気を良くして、俯きがちに肩を震わせ笑いを凝らす。
「ふふっ……〈アトラシア〉の調子はどうでしたか隊長？」
「いい機体さ。……すごく扱いづらい事を除けばな」
そう言ってデイズは肩に背負ったスーツを車のボンネットに放り投げると、胸ポケットからサングラスを取り出す。

「――確かに、上の連中が手放しでよこしてきたギアだ。一歩間違えたら星系一つが飲み込まれるだろうな」
「制御に欠陥でも？」
「どうにも危ういって事だ。駆動系を動かすたびに冷や汗が出る」
疲労感に零れる白い吐息。
怖々と肩をすぼめるままに、デイズはポケットからＰＤＡを取り出し、指で画面を操作した。
スゥとＰＤＡから浮かび上がる立体型のディスプレイ。
球体状に漂うモニターの中に立ち尽くす白い巨人を覗き込みながら、デイズは軽く自分の首輪を撫でる。
「まぁ、すごいとは思う。……よくできたおもちゃだよ」
「不満そうですね」
「俺が？」
目を丸くするデイズを尻目に、男はハンドルに身体をもたれさせながら、前のめりに街を見渡す。
「何か、ゴルド様に言いたい事があるんじゃないですか？」
「――正直なところ、〈エルザ〉や通常機体の方が使い勝手はいいさ」
心のうちを見透かされたようで、デイズはそう言って首をすぼめて苦笑いを見せた。
「あんな出力、対フォートギア戦で使えんだろ。味方を巻き込むことになる。正直あの機体でお前らと連携合わせられるとは思えない。」
「ではどこで使うのですか？」
「知らんよ」
男の言葉にため息をつくと、デイズはポケットにＰＤＡを捩じりこみ、うんざりした表情で空を仰いだ。
「じじいの物言いじゃ、〈アストライア〉共々を使って連合を制圧するのに使うらしい」
「ゴルド様らしい」

「――じじいは本気だぜ」
「ますます」
「ったく……」
懐かしむように呟く男を横目に、デイズは地面に唾を吐き、靴で濡れた地面をきつく踏みつける。
「〈アトラシア〉を使ってゴルドのじじいがほざくような事態になるとは到底思えんというが、俺の意見だ」
「なぜ？」
「現状、コロニーレベルでの巡航艦や単独空間跳躍を行う大型強襲艦にはブラックホール機関が積まれてるのは確かだ。
ただ出力なんてその程度だ。銀河一つを征服するのに到底必要エネルギーが満たせるとは思えない」
「確かに。船の中に船が一機積まれているのと同じ状況ですからな」
「カタログスペック上はな」
「ですがあなたがいる」
「俺一人で戦うわけじゃないんだぞ」
「老はそのつもりですよ」
「反吐が出そうだ……」
トントントンッ
ゴルド邸から聞こえてくる軽快な足音が二つ。
デイズはボンネットに引っかけっていた黒の上着を脇に抱えると、もたれかかっていた身体を起こした。
「まだじいさんは何かを隠しているかもな」
「あの機体にですか？」
「あの三人にだ」
「それとも、あなたか……」
「――――くだらん物言いだ」
「隊長は、ゴルド様の夢を信じて、船に乗るのですか？」
「さてな……」
ガチャリ

と、玄関の扉が開き、飛び出す二つの人影。
「ご、ごめんなさいっ」
汗をうっすらと滲ませながら、小走りで門扉までの階段を下りるのは白いワンピース姿のエリス。
大きな鞄を両手に引きずるようにエリスは門扉を開きデイズの下へ歩み寄る。
「す、すいません……えと……荷物最後にまとめてたら……」
息遣いも荒く、エリスはギュッと胸を押さえ屈みがちに囁く。
デイズはムスッとした表情はそのままに、小さく肩を落とすと、苛立ち紛れに銀髪を掻きむしった。
「まったく……マキナは？」
「えと……すぐに出るって」
そう言ってエリスは息を整えつつ、顔を上げようとする。
――ジワリと滲む景色。
キィインッ……。
窓に爪を立てるかのような不快な音。
空間が歪んだ次の瞬間、スカートと紅いシャツを着込んだ金髪の少女の姿がデイズの頭上に現れた。
「準備できたぁ！」
「……重たい……」
がっしりと首に腕を絡めしがみつく金髪の少女に、デイズは青筋を浮かべつつ振りほどいた。
華奢な身体が宙を舞い、ボンネットの上に小さな足が乗ると、鞄を肩に引っかけマキナは満面の笑みでデイズを見下ろした。
「えへへっ、お待たせおじさんっ」
「……とりあえず降りろ」
説教を垂れたい気持ちを抑え、デイズはため息交じりにマキナの両脇を担いで彼女を車から降ろす。
そして、エリスとマキナの二人を並べ、デイズは拳を軽く作る。
鋭く紅い目を細める――

「……痛いぞ」
「は、はい……」
パシンッ
でこピンが額に入り、エリスはジンワリと涙を眼に浮かべながら、紅く腫れた部分を両手で押さえた。
そして痛みに唇を軽く噛みながら、小さく肩を落とすデイズを不安げに覗きこむ。
「あの……」
「どんだけ規則が緩くてもな……一応銀河連合所属軍隊だ。……規律、時間規則はきちんと守らないといけない。
わかってくれるな、エリス」
「……はい、えと……ごめんなさい」
「――いい子だ」
しょんぼりとするエリスに、デイズは一応の反省が出来たとみて、ほんのりと笑みを滲ませた。
と、クイッと引っ張られる袖。
ビキリと青筋を浮かべると、デイズはスゥと目を細めて手元を見下ろす。
「ねぇねぇおじさん。時間ないんだったら早く行こっ」
キョトンと灰色の瞳を輝かせながら手を引っ張るマキナに、デイズはため息交じりにゆっくりと拳をつくる。
そしてコツリとマキナの額に拳をあてる――
「……。お前の為に時間を割いているんだろうが、アホが」
パシンッと乾いた音が響く。
「いったぁい！」
「有り難く受け取ってくれたみたいで俺は嬉しい」
紅く腫れあがった額を押さえ、その場で軽く悶えるマキナを横目にデイズは車の後部座席の扉を開いた。
「乗れよ。そろそろ出航時間だ」
「はいっ」

「ふぁい……」

5話目

海上に広がる巨大な人工島。
管制塔が中央にそびえたつ重厚な機械に覆われた島には、既に芝生の代わりに対空砲がいくつも設置されていた。
島の先端には現行強襲艦にも使用される超長距離重粒子包が空に向かっ迫り出し、海鳥が砲塔の上に群がる。
その大きさは、基地内を歩く機人が小人の様に思えるほどにそそり立つ。
そこはトリフィア第一軍事基地。
基地内部では、飛行艇や星系間飛行を行う軍の巡航艦が停泊し、或いは空へと反り上がった長い滑走路から空へと旅立っていく。
上空には星系間の空間跳躍を可能とする巨大な空間歪曲装置が回転し、その巨大なリングへ向けて飛び立つ船が吸い込まれていく。
「ブリッジメンバー集まってぇ……」
そして島の中央、白い衣を纏って、一機の大きな船が飛び立とうとしていた。
島の表面を撫でる潮風に揺れる船体。
地面から浮かんだまま、全身から光の粒子を羽衣の様に靡かせながら〈アストライア〉は潮風の中に漂う。
「……うっし。点呼するわね」
少し甲高い音を立てる背部の三つの噴射口。
エンジン音が周囲に響き、既に周囲の空間はジンワリと歪み、今にも飛び立とうと透明な翼を広げている。
「艦長」
「何エミリアぁ……私昨日から感応機の調整で寝てないんよぉ」
「はぁ」

「いやぁ……寝てないの辛いなぁ……ホント三時間ぐらいしか寝てないしぃ」
息をするように装甲の隙間から吹き上がる光の粒子。
その光の粒は、底部の搬入口から入る黒い車両の装甲を撫でていく――
「でさぁ」
「今、隊長とエディオールさんが到着したの事です」
「点呼後で。私ちょっと用があるから」
ゆっくりと閉まっていく搬入口。
車が格納庫の隅に止まり、デイズは後部座席から這い出すと、後からついてくるエリスに手を伸ばした。
「俺達が最後みたいだな」
「す、すいません……」
「もう叱った後だ。反省してくれたらそれでいい」
申し訳なさそうに首をすぼめるエリスを車の外に出すと、デイズは再び車両の中に手を伸ばした。
ギュッと掴む小さな手。
爪跡が残るくらいの痛みを覚えながら、デイズは困ったような笑みを這い出すマキナの膨れ面に見せた。
「ったく……怒るなよマキナ」
「…おじさんの凸ピン痛かったっ」
「隊長って呼んでくれたら、次はもっと優しくしてやるよ」
グイッと引っ張り上げる華奢な腕。
長い髪が宙に浮き、軽々と引きずりだされるままにマキナは風に乗りながら軽やかな足取り床に爪先を下ろした。
フワリと後ずさるままに翻す長い金髪。
丸太の様な大きな手を振り解くと、ほんのりと紅い頬を膨らませながらマキナはムスッと口を尖らせて呟く。
「……おじさんのばかぁ」
「ん？」

「ぜぇえぇったいっ、隊長なんて名前で呼ばないもんっ。おじさんはおじさんだもん！」
フイッと背中を向けた刹那、マキナは景色に吸い込まれるようにして、一瞬でその場から姿を消した。
デイズはサングラスを外しながら、風の如く姿を消す少女に肩をすくめる。
「ったく……怖いな」
「す、すいません。マキナちゃんが悪い事をしちゃって……」
「分別なんてすぐにわかってくる。エリスが謝る事じゃないさ」
サングラスを胸ポケットに引っかけながら、デイズはそう言って戸惑うエリスの背中を軽く押した。
そして、車から出てくる初老の男、エディオールを背にデイズは告げる。
「俺はブリッジに行く。エディオールはライアスをハンガーに呼び出しておけ」
「〈エルザ〉の搭乗準備ですか？」
「――少し匂う」
「？」
「なんとなくだよ」
声を潜ませそう言ってその場を去ろうとするデイズに、エディオールは戸惑いの表情を浮かべ立ち尽くす。
そして薄暗い格納庫から二人が出ていき、エディオールは首をかしげつつもポケットに手を突っ込んだ。
そして取り出したＰＤＡを操作し、画面に一人の青年の姿を映す。
『ねぇねぇ君たちぃ、今度仕事がすんだらエリナス第三星域で僕と遊ばない？』
「ライアス・ホーネス」
『ん。僕の名前が放送に乗ってる？』
ＰＤＡを口元に添えながら、うっすらと綻ぶ口の端。
盗聴器越しに声を聞きつつ、エディオールはＰＤＡでライアスに

向けて艦内放送で呼び掛けを始めた。
『いやぁ僕が呼ばれてるのかな。でもまだ君たちと話したいからさ』
「昨日海岸の街バーで酔いつぶれて、介抱された男性宅で処女を散らしたライアス・ホーネス」
『えええええええええええ！』
「目の前で口説いている女など気にも留めず、男の尻だけに目をぎらつかせる根っからの男性性愛者、ライアス・ホーネス」
『いや確かに昨日は飲み潰れて気が付いたら知らない天井を見てて って違うのぉおおおお！
誰、誰が僕を見てるの！　いや僕ホモじゃないから！ホモじゃないですから！』
「そう趣味は熟女物。中でも中だるみした三段腹が好物、とかなり年の行った女性が好きな模様のライアス・ホーネス」
『ちょっ、これエディオールさんでしょ！　やめて、違いますから、僕ホモじゃないですから！　ちょっと幅広い年齢層と種族層の女性を愛していきたいだけですから！』
「データライブラリに今一番尻の穴をつけ狙っているデイズ・オークスの画像をこれでもかと貯め込んでいる男ライアス・ホーネス」
そう言いながら、エディオールはそっとＰＤＡの画面を操作する。
すると、エディオールがアリシアから渡されたデイズ・オークスの画像が、容量一杯になるくらいに贈られる。
そしてライアスのＰＤＡにデイズの姿が映し出される――
『ほら、証拠に――あああああああああああああああああああ！』
「――繰り返します。ホモで熟女好きのライアス・ホーネス少尉。今すぐハンガーまで来てください」
『ち、ちゃうねん……僕やないねん。僕ホモとちゃいますんやぁあああああああああああ！』
そして今日、ライアス・ホーネスは二つの十字架を背負う事になった。
熟女好きと男性好き。

決して相容れぬ二つの号を背負いながら、今日もライアスは血の涙を迸らせ、修羅の道を歩いていく。
決して報われぬ道を――
『違うんですぅうううう！』
「……熟女好きは否定しないんですね、ライアス君……」
艦内放送へとつないでいたアクセスラインを切ると、エディオールはため息を漏らすままに白くなった髪を掻き上げた。
そして、エディオールもまたフォーギアが格納されたハンガールームへと急ぐ。
目を細めるままに、戦いの音が血が付く気がして、エディオールは久しく身震いに身体をよじった。
口元が自然とほころんだ。

6話目

艦内放送が終了し、アリシアはバキバキと指の骨を鳴らしながら薄ら笑いを浮かべ廊下の床に踏み砕く。
「……後でちょっとしめておかないとね」
「あんまりいじめてやるなよ」
ため息もそこそこに、肩をいからせるアリシアを尻目に、デイズは後ろを速足で歩くエリスに手を伸ばす。
「ほれ、遅れるといかん」
「あ、はい……」
伸ばした手のひらは、エリスの手がすっぽりと隠れるほど大きく、エリスは躊躇いがちに手を伸ばした。
グッと前に引っ張られる華奢な体。
握りしめられた手はとても熱く、エリスは頬を赤らめると、気恥ずかしそうに首をすぼめデイズの隣を歩く。
「手……熱いです……」
「我慢してくれ――アリシア。じじいは？」
「画面越しならいくらでも」
じろりと睨みつけられる視線に、ハッとなりエリスは怖々とアリシアから顔をそむけ項垂れる。
「なんだ。こっちに乗ってないのか」
「――あのくそ親父基地に残るですって。今頃自分が入る墓穴でも掘ってるんじゃないの」
「後で俺も手伝うさ。……客が来てるだろ」
ピタリと止まる足。

慌ててエリスも足を止めると、目の前にそびえたつ分厚い扉を見上げては、不思議そうに首を傾げた。
扉の横には読み取り端末が設置されていて、アリシアはその端末を前に指をかざす。
「どこ？」
「上」
音もなく左右に開いていく扉。
デイズに引っ張られるままに、重たい扉をくぐると、そこに少し開けた空間が広がっていた。
ゴルド邸のリビングが三つは入りそうなくらい広い空間。
楕円形に丸い部屋の輪郭に沿うように椅子がいくつか並んでいて、その中央にはひと際大きな椅子。
その椅子の周りを丸い球体が囲み、中には蒼く輝く液体が並々と注がれていた。
水の中を漂う光の粒子。
光の粒子が蒼い水の中を対流し、真っ白な柔肌をなでていく。
水の中、黒髪を靡かせ、ゆっくりと開く黒い瞳。
視線を泳がせ後ろを振り返るままに、大きな椅子に身体を固定させ、部屋、管制室の中央にミカが佇んでいた。
「ミカちゃん……」
目をジトリと細めるままに、ぷくっと膨れる頬。
〈――遅い……〉
頭の中に響いてくる声に、エリスはウッと喉を詰まらせるような表情と共に申し訳なさそうに首をすぼめた。
「ご、ごめんなさい……」
〈……手を離して〉
「……は、はい」
握っていたデイズの手を名残惜しそうに話すままに、エリスは恐る恐るミカが佇む球体へと歩み寄った。
手足は椅子に固定されていないものの、いくつものケーブルがミ

カの身体に張り付く。
　裸に近い服は、肌に溶け込むくらい白く、水着を肌蹴させたような様相で、エリスは体のラインがはっきりとわかる服装に顔を赤らめた。
「ミカちゃん……恥ずかしい？」
　コクリとミカは少し頬を赤らめて頷く。
〈……お父さんに見てもらうの……初めてだから〉
「……私もそんな服着るのかな？」
〈うん……エリスも私の代わりに入る事になるかも……〉
「そっかぁ……」
　同じく頬を赤らめながら、裸の様なスーツを着込むミカの姿を、エリスはまじまじと見つめた。
　そんな二人を見つめながら、デイズは管制室中央の球体に苦い表情を浮かべた。
「……あれって」
「接続能力矯正装置よ。意識の拡大を補助し、知覚をあらゆる場所にリンクするようにしてあるの」
「……この船の管制は三人がやるのか」
「艦内システム管制、動力管制、艦制御管制、火器管制――もろもろ全部」
「……」
「残り二人は〈アトラシア〉の制御とあなたの補助」
「ならオペ子要らんだろうに……」
　苦い表情を滲ませながら、デイズは楕円形に広がる管制室の隅に座る数人のブリッジクルーを見渡す。
　そして、その中の一人の背中に、更に紅い目を細める――
「エミリア……」
　ガクリと肩を落とすデイズの声に、暇そうに操作盤を前に座る女、エミリアは振り返って大きく手を振った。
「おっ、隊長」

「お前、いつオペ子に？」
「私ここ数年事務職やってたんですよっ。その関係でこっちに転職です」
「――〈エルザ〉余ってるんだからこっちにパイロット回せよ」
恨めしげに睨みつけるデイズに、アリシアは嬉しそうに綻ぶ口元をキュッと締め腰の後ろに手を組んだ。
「本艦の製造目的は〈アトラシア〉と〈アストライア〉の試験運用が目的よ。この船と〈アトラシア〉のみでゴルド司令からの命令を実行してもらうわ」
「……モルモットか」
「試験運用って言ってちょ」
「いや」
「なんにせよ、こっちの方が本星の方にも角が立たずに済むわ」
――激しい地鳴り。
「……多分ね」
雲を貫き、空にそびえる一筋の閃光。
全方位に映し出されるモニターには、大きな爆発が基地の中に迸り、瓦礫と爆風が艦の白い装甲を撫でた。
その後、潮風に晴れる土煙。
ソレと共に地鳴りはゆっくりと止み、アリシアは球体の中に佇むミカに囁きかける。
「ミカ。大丈夫？」
球体に注がれた蒼い液体の中、ミカは小さく頷くと、身体を丸めるように浮かんだまま静かに目を閉じる。
スゥと息を吸い込む。
意識が空の向こう、星の闇を貫いて広がっていく――
〈――怖い人たち……たくさん来ている〉
ギュッと胸を掻きむしる小さな手。
息苦しそうに眉をひそめるミカに、球体の傍にいたエリスは心配そうに彼女横顔を覗き込む。

「ミカちゃん……」
「――マキナ」
デイズの鋭い言葉に、ジンワリと滲みだす華奢な身体。
金色の髪を靡かせながら、スカート姿の少女が宙に浮かびながら、目を細めたデイズの眼前に現れた。
「は、はい……」
表情はどこか暗く、後ろめたそうにに視線が泳ぐ。
トンと不安げに降り立つ爪先。
ギュッと胸を押さえ気まずそうに首をすぼめるマキナに、デイズは困ったような笑みを滲ませた。
零れる深いため息。
そしてグッと丸太のような褐色の腕を伸ばす――
「んんっ……」
更に空を引き裂く閃光が大地を切り裂き、爆音と爆風が基地の地面を抉り飛ばす。
「よく来てくれた、マキナ……」
地鳴りに揺れる床。
激しい光がモニターに広がり周囲が明るくなる中、デイズは頬笑みを浮かべ、不安に項垂れるマキナの髪を撫でた。
「……私……」
「もう怒っていない。俺の言う事、少しだけでも聞いてくれるか？」
「――ごめんなさい……隊長」
「おじさんでいいさ。……ミカを手伝ってやってくれ。不慣れなのは皆同じだからな」
「……うんっ」
「いい子だ」
灰色の瞳に力がこもり、映るのはデイズの顔。
マキナはデイズに力一杯に頷くと、クルリと踵を返すままにはじき出されるようにミカの下へと飛び出した。
そしてミカが収められた球体に張り付くマキナを横目にデイズは

声を張り上げる。
「じいさんっ、少し顔を出せや」
『お、なんじゃ？』
前面のモニターが変わって老人のいる基地中央管制塔の一室が映され、デイズは不満げに顔をしかめた。
「誰だよ上でうろついてるハエは」
『ワシのマブダチ』
「友達選べよじいさん」
『ワシは友達が少ないんじゃ』
ニッコリと笑う老人にデイズはうんざりしたような表情を滲ませると、クイッと手招きをするような仕草を見せた。
「面見せろよ。客人に顔出さないなんてマナー違反だ」
『デリオも泣いて喜ぶじゃろ』
薄ら笑いを噛みしめ、老人は自ら座る椅子の肘かけのパネルにそっと指を這わせた。
二つに割れるモニター前面。
老人の顔が左により、代わりにしわがれた痩身の老人がムスッとした顔でこちらを見下ろしていた。
そして、その目が立ち尽くすデイズの紅い目と合う。
刃の如く鋭く紅くぎらつく双眸を細める――
「よぉ、デリオア・ミルドレシア星系監督官殿」
『――デイズ……デイズ・オークス……！』
「驚いたね。五年前に会った時は本星勤務のただのお坊ちゃんかと思っていたが。こんな辺境までごくろうさん」
『ゴルドぉおおおお！』
デリオと言われた老人から迸る怒声に、ゴルドは画面越しに怖々とみをすぼめ、至極嬉しそうに肩を震わせた。
『怖いのぉ……ワシと会えた事がそんなに嬉しいか？』
『貴様！　こちらに送られた記録では、デイズ・オークスはＫＩＡだと！」

『デイズがそんなに恐ろしいか？』
ニィと歯をむき出して綻ぶ口元。
見つめるその目は、見下すかのように淀み、痩駆の男はゴルドの薄ら笑いに顔を真っ赤にして怒鳴りつけた。
『黙れ落ちこぼれが、貴様なんぞ本星でゴミクズ以下だ！息を吸う事すら禁じられる！』
『目が泳いでいるぞ、少し落ち着かんか兄弟』
『ぐぅ――ミルドレシア本星より通達がある……！』
言われるままに、男の息遣いが収まる。
だがその顔はその息遣いに反して徐々に赤黒くなっていき、その声も徐々に震えを帯びている。
視線は落とし、デイズの姿を見ようとせず、ゴルドは可笑しそうに笑う。
『くくっ……続けたまえ』
『貴様ら星系第三惑星第一軍事基地は犯してはならぬ禁忌を犯した。我ら連合軍の所有物を私物化し、あまつさえ独自に軍事力を高めているという事実だ』
『臭い所なんぞどこも一緒じゃて。お前の息子の星の軍事力、資金も含めてデータを本星に送ってやろうか』
『黙れ！　あまつさえ一年前、連合国家所属ザール能力機関を襲撃、研究所を壊滅させたそうではないか！』
『あれは本星政府から割譲していただいたワシらの敷地じゃ。勝手にザール機関が居座っていたにすぎん。
それにワシらは立ち退くよう通達は何度もした。牙をむいて襲撃してきたのは向こうさんじゃよ』
『それをどうやって証明する！』
『ザール機関は律儀にもわしらの通達に返事を何度かよこしている。宣戦布告も受けた』
『それはねつ造だ！』
『生きた死体も用意している。向こうの研究員と司令官の脳みそと

脊髄を塩漬けにしているだけじゃがの』
『貴様が作ったダミーに過ぎない！　お前の言っている事など全て――』
――迸る轟音。
飛び散る機械片。
椅子に手すりが画面越しに砕け散り、老人の細い腕が鋭くめり込むままに、火花が断線から零れる。
ニィと綻ぶ口元。
嬉しそうに目を細めるままに、老人はゆっくりと腕を手すりから引き抜き、自らの首に指を添えた。
『客人をいつまでも待たせるわけにはいかんのでな』
『ぐ……ぐぐ……』
『繰り言は飽いた。どの道、基地に砲撃をけしかけられた時点で、ワシらが取る道は一つしかないんじゃよ。
のぉ、デリオよ。その建前を引っ込めよ。はっきりと物を言え』
ツゥと首筋を横に撫でる親指。
牙をむき出し、老人は本当に嬉しそうに顔の皺を浮かべながら、威嚇するように低く唸り声を響かせる。
『――ワシの首が欲しいんじゃろ』
『抜かしたな……！』
『欲しいものを欲しいと言わない、手を伸ばさない――お前は実に哀れだな、腰ぬけデリオよ』
『万死に値する！』
『黙って取りに来い――命を賭ける覚悟でかかってこいよ、ワシに二度目はないからの』
『殺してやる！』
唾液を画面に撒き散らし、最後は獣のような喚き声と共に男の姿がプツリと消える。
そして残るのは俯くゴルドの姿。
零れる深いため息。

軍帽を脱ぐと共に、老人は痛む右の拳を膝に置くと、力なく肩を落としため息交じりに口を開いた。
『デイズよ……』
「ん」
『あの男はバカじゃった。辺境に追いやられたワシをいつまでも目の敵にして、結局こんな所まで追いかけてきおって。
ワシを憎んだばっかりに……』
「手抜くなよじじい」
『――賭ける命は、とうに捨てたよ。夢をかなえると決めたあの日からの』
「ひどいイカサマだ」
独り言をつぶやくゴルドを尻目に、デイズは可笑しそうに肩を震わせると、そう言って踵を返した。
そして、着込んでいたスーツを脱ぎ棄てネクタイを外す――
「……エリスッ」
「は、はいっ」
脱ぎ捨てたネクタイをポケットに突っ込むと、デイズはミカの傍にいたエリスに手招きをした。
エリスはキョトンとしながら不思議そうに首を傾げる。
そして、鋭く尖ったデイズの紅い瞳を見つめる――
「……え？」
――伝わる思考。
エリスは茫然と立ちつくしたまま、少し青ざめた表情で険しい表情で睨みつけるデイズを見上げていた。
恐る恐る開いた唇が震える。
「……私が……乗るんですか？」
「〈アトラシア〉は二人乗りだ」
カツリ
革靴の渇いた足音が響き、エリスはビクリと肩を震わせ、キョトンとするマキナの後ろに隠れようとする。

「戦えとは言わん」
グッと伸びる褐色の大きな手。
おびえるエリスの手を力強く掴むと、デイズはゆっくりとエリスを引きこむままに両膝を降り腰を落とした。
「だが、いつまでも俺の背中に立って逃げるような女を、俺は傍に置いておきたいとは思わない」
ふわふわと泳ぐ蒼い瞳。
涙を眼に浮かべ、青白い表情でエリスは、弱々しく首を横に振って胸元を不安げに書きむしる。
「……やだ……怖い」
「俺が信用ならないか？」
「え……」
「〈アトラシア〉は二人乗りだ。お前がヘマをすれば俺がお前を助ける」
胸に添えていた手を握りしめると、デイズは惚けるエリスの両手を重ね、熱がこもるように力強く握りしめた。
そしてコツリと額を擦り合わせ、紅く滲んだ眼を閉じる――
「だけど……もし俺がヘマをすればお前が俺を助けてくれ」
――少し、汗ばんだ手が震えている。
少しずつ薄らいでいく黒い心の靄。
エリスはデイズと同じように額を押しつけたまま目を閉じると、熱っぽい中年男の掌に意識を集めた。
そうして、ゆっくりと息を吐き出す――
「……デイズ……怖がってる」
――聞こえてくる、男の心音。
「怖い……デイズも……」
「どれだけ戦いに慣れてもな、怖いもんさ。死ぬのは誰だって怖い……仲間を失うのはもっと怖い……」
「……」
「……俺を助けてくれ、エリス」

胸に響く低い声。
胸が少しずつ高鳴っていき、エリスは頬を赤らめ、目を閉じながらデイズの息遣いに呼吸を合わせる。
息を小さく飲み込む――
「――はいっ」
「ありがとう……エリス」
ゆっくりと開く紅い瞳。
それに合わせてエリスは恐る恐る目を開くと、滲んでいた涙をぬぐい立ち上がる大柄な男を見上げた。
天井の灯りに陰る大きな背中。
グイッと丸太のような大きな腕が伸び、エリスは少し表情を強張らせ、震える唇をかみしめる。
不敵に笑みを浮かべる褐色肌の男を碧い瞳に映す――
「行こうか、エリス」
「……。ぶっ飛ばしッてやりますっ」
グッと両手で掴む大きな手。
不安そうにしていた目を輝かせるエリスに、デイズは少し不思議そうに首を傾げ、戸惑いがちにうなずいた。
「お、おう……」
「行きましょうデイズっ」
「エリス、結構男っぽい言葉を使うんだな……」
――誰に影響されたのだろうか。
そんな疑問を頭に浮かべながら、デイズはぐいぐいっと腕を引っ張るエリスに身体を引かれ、管制室を出ようとした。
「あ、少し待ってくれ」
と、デイズはエリスを引っ張り返すとともに、足を止めると、後ろを振り返った。
大きく浮かび上がる青筋。
顔を引きつらせ、鬼のような笑みを浮かべるアリシアに、デイズは怖々と首をすくめて目を反らす。

「俺はお前のそういうところが苦手だ……」
「――別にいいし」
「ちゃっかりスーツ回収してるところが尚更……」
「何か用？」
むっとしながらデイズのスーツを胸に抱きしめるアリシアに、デイズは中央の球体に佇むミカを指差した。
そしてミカが身につける水着の様な薄いスーツを睨み、男は呻く。
「……あれ、誰の趣味よ」
「親父」
「――娘共々良い趣味してんぜ」
「でしょ」
「イカれてやがる……エリスは着なくていいからな」
力強く頷くエリス。
デイズは彼女の頭を軽く撫でると、ＰＤＡをポケットから取り出すままにエディオールに連絡をとりつけた。
「準備は？」
『――敵の降下がまだ確認できていません。長距離兵装に切り替えますか？』
「死んだらおしまいだ。全部使っていけ」
『僕はどうするんです隊長？』
「ホモは待機」
『違うって言ってるじゃないですかぁ！』
「〈エルザ〉の数は基地内の方が多い。数が一つ増えても一緒だ。もうすぐ発進するんだしな。おとなしくしておいてくれ」
『り、了解……』
「ははっ。宇宙に出たらまた頼むわ」
笑い声を滲ませながら、デイズは管制室を出ていく――
じっとりと睨みつける視線。
ニィと綻ぶ口元。
アリシアはムスッと口を尖らせたまま立ち尽くしていたが、程な

くしてデイズが去ると途端にスーツを顔に押し付けた。
「ふがふがふがっ！」
動物のような鳴き声を洩らしながら、擦りつけるようにデイズのスーツに顔を押し付け鼻息を洩らす。
「むほぉおおお……いい匂いぃいいい……これだけで明日も頑張れるわぁ……」
〈――変人……〉
ぽつりと呟くままに、ミカは呆れた表情で体に巻きつくコードを蒼い水に漂わせ、宙を漂う。
そして胸を押さえると、身体を丸め、不満げに口を尖らせる――
〈――いいなぁ……〉
「ミカ？」
ぽつりと呟くミカにマキナは首をかしげていると、ミカは体を丸めたままマキナを見下ろした。
ジトリとした目線。
少し頬を膨らませながら、ミカは球体越しにマキナに囁きかける。
〈――マキナは……お父さんの事好き？〉
頭に声が響き、マキナは少しだけ顔を赤くして、慌てて顔を伏せる。
「べ、別にぃ……おじさん少し加齢臭するし」
〈――マキナは……好き？〉
「……わかんない。でも……手が熱いのは、好き、かも」
〈……そ〉
気まずそうに眉をひそめるマキナ一言そう呟くと、再び目を閉じてミカは蒼い液体の中で両腕を広げた。
バチリと漂っていたコードに緊張が走り、激しく波打つ。
コポリと半開きなった口元から零れる気泡。
コードを通じて、頭の中に情報が流れ込み、恐る恐る開いた視界の向こうにいくつも映像が映る。
はじけては消える無数の情報の海。

磁気嵐が視界をよぎり、ミカはスゥと目を細め情報に満たされた液体に両手を広げる。
〈――行こう〈アストライア〉……〉
トクンと脈打つ結晶。
手の間から液体が零れ、手の中で光を放つのは『システム』。
リンケージの力によって物質化した情報の塊を、両手に掴んだ胸に抱き、ミカは小さく息を吐くままに呟いた。
〈――発進します……〉

7話目

『というわけで船から降りないように出てね、エディオールさん』
「アナウンスどうも、エミリア」
待機用のハンガー。
細長いエリアには、四機のフォートギア〈エルザ〉が周囲のフックに固定され壁に張り付いていた。
周りには、整備員とアンドロイドの姿がちらほらと映り、固定されたフォートギアの周りには搭乗用のキャットウォークが張り巡らされている。
「……では通達します。これから発進しますので各員は二号機から離れてください」
ガコン……
ゆっくりと剥がれる固定フック。
搭乗用のキャットウォークが壁に収納され、物々しい音を立てて一機の〈エルザ〉が壁から離れた。
各部から蒸気と共に舞い上がる光の粒子。
手には巨大な筒を携え、肩に巨大な排熱ファンのついたジェネレーターが背負わされている。
巨人はゆっくりと細長い通路を歩くとともに、ハンガーエリアの端にあるハッチにたどり着いた。
「出ますよ」
――吹き上がる爆煙。
ハッチを開いた瞬間、光の筋が上空から降り注ぎ、攻撃を受け瓦礫の舞い散る基地の様子が巨人の前に映る。
そして、舞い上がる粉じんの中、空に向かって砲撃を行うフォーギアや固定砲台が見える。
衝撃波は地鳴りとなって周囲を揺らし、基地の対空砲が祭囃子の

如く空を彩る。
零れるため息。
操作レバーを押しこむままに巨人を動かしながら、エディオールは巻き上がる土煙に苦い表情を浮かべる。
「……まったく、人の家に土足で上がり込む、マナーがなっていませんね」
前方へと伸びる艦の滑走路へと滑るように進みだす巨体。
背部に背負っていた巨大なジェネレーターを外し、巨人は砲撃の雨の中、携えていたバズーカバレルとつなぎ合わせる。
回り出す排熱ファンから吹き上がる光の粒子。
ジェネレーターとバレルに取り付けられたマウントグリップを握りしめ巨人は砲塔を空に向ける。
「〈エルザ・パラ〉行きますよ……」
――ディスプレイに、蒼く澄んだ空が映る。
空の向こう、星の瞬きか、暗闇に差す光かといった小さな点が映り、エディオールは小さく息を吐く。
そして、闇に輝く光に目を細める――
――迸る光の柱。
大きく腰を落とすとともに、関節から吹き上がる光の粒子。
ソニックブームが周囲の空気を大きく歪め、バレルから放たれた閃光が空を大きく穿つように〈エルザ〉から飛び出した。
グッと反動で後ずさる巨人。
レーザーラインはバレルから飛び出すままに空気に減衰することなく大気を切り裂き、宇宙へと昇る。
大型艦を飲み込むほどの光のうねりが、トリフィアの宇宙圏の艦隊へ迫る。
「……旗艦にあたらず、か」
――遠くに見えるのは光の破裂。
星が死ぬ瞬間のような光景がモニターに映り、エディオールは不満げに口を尖らせる。

シュゥウウ……
排熱ファンが激しく回り、バレルから吹き上がる光の残滓。
間接が軋みを上げ、腰を深く落としていた巨人は身じろぎをするとともに、砲塔の向きを少しだけ変える。
グイッとマウントグリップを握りしめ、身体に砲塔を固定する――
ゆっくりと地面から離れていく白い船〈アストライア〉の先端から吹き上がる閃光が空を抉り飛ばす。
それに追随するように無数のレーザーが基地から空に向かって広がり、デリオの艦隊を迎撃する。
「精が出るな……」
三発目の砲撃を始めようとした瞬間、エディオールの耳に聞こえてくる低い声。
――ジワリと滲む景色。
ヌルリと姿を現す大きな背中。
外套のように全身から吹き上がる光の粒子。
口の端から零れる白い息。
白い装甲に風を纏いながら、エディオールの〈エルザ〉の前に狼の巨人〈アトラシア〉が姿を現した。
「どうだ？様子は」
「二次三次の対地砲撃はそろそろ止むでしょうね」
滑走路から数センチほど浮かぶ巨体。
肩や腕には何も装備しておらず、腰にレーザーエッジのナイフがあるのみ。
紅くぎらついた目を空に向けながら、オオカミの頭をした巨人は空から降りる光の雨を険しい表情で見つめる。
「なら、そろそろギアの降下が始まるか」
「どうします？」
「その前に終わらせたらいい。簡単な話だ」
「はい」
「エディオールは次の射撃を終えたら艦に戻れ。〈アストライア〉

はトリトン第一衛星基地に向けて航行を始める。
すぐに単独跳躍にはいる。巻き込まれるなよ」
「隊長は？」
「――宇宙に向かって二人でデートだよ」
「……アリシアに怒られても知りませんよ」
「恐ろしい話だ――じゃあ行こうか、エリス……」
景色に溶けるように消えていく白い鎧。
まるでゴーストのように姿をくらますその様子に、エディオールは驚きに小さく目を見開き首をすぼめた。
「……素晴らしい」
口元が自然綻び、エディオールは嬉しそうに目を細めた。
〈エルザ〉は消えた〈アトラシア〉の向こう、蒼く澄んだ空に向かって再び砲塔を持ち上げる。
排熱ファンが悲鳴を上げ、バレルの先端に集まる光のきらめき。
ゴォオオオッ
そして吹き上がるソニックブーム。
上昇を始める〈アストライア〉の先から、再び空に向かって光の柱が蒼天に向かって大穴をあけた。

8話目

――暗闇から這い出す白影はまるで、幽霊のようだった。
「な……なぁ！」
トリトン大気圏外、二十隻あった強襲艦は既に十五隻までになり、残った船に搭載された機人で降下を仕掛けるところだった。
十四隻の船に囲まれた、ひと際大きな旗艦の前方の景色が大きく歪む。
ねじ曲がった空間から這い出す巨大な腕。
――グルルルゥ……。
光の粒子を口の端から吐き出しながら、牙を覗かせ聞こえてくるのは微かな唸り声。
スゥと細める深紅の双眸。
真っ白な継ぎ目のない装甲を纏い、フォートギア〈アトラシア〉が何もない空間から旗艦の前に姿を現す。
旗艦管制室、呆然と立ち尽くすデリオアの目の前に悠然と腕を伸ばす――
「な……な……」
――声が聞こえる。
「……じいさんからの伝言だ」
「デイズ……オークス……」
深々とめり込む腕。
振りかざした拳は、何重にも隔てられた壁を一気に突き抜け、〈アトラシア〉はその手のひらにデリオア・ミルドレシアを捉えた。
突き破った壁の隙間から無重力へと投げ出される肉片や金属片。
周りの人間は既に宇宙へ吸い込まれ、床に座り込んだデリオアが

ズルズルと黒い海へと引きずられ始める。
バキリ……
大きく開いた手が壁を食い破り、震えるデリオアへと迫る。
見開いた眼に巨人の姿が映る――
「ご、ゴルドぉおおおおおおおおお！俺を殺そうって言うのかよぉおおおお！」
「……静かに眠れよ」
パシュッと音を立てて開く手のひらの装甲。
開いた手のひらの中には、黒い球体がぽっかりと浮かび、不規則に脈打ち、やがて歪に膨れ上がる。
「いやだぁあああああああああああ！」
球体は重力を増し、地面を這って逃げる男を一瞬で引き込む――
「ゴルドぉおおおおおお！　助けてぇえええええ！」
「アギトを開け〈ゼノアトラ〉……」
――展開される虚無の空間。
突き出した〈アトラシア〉の右腕から強襲艦の上部を飲み込むように、音も無く黒い球体が膨れ上がった。
光を全ての見込み遮る漆黒の闇。
巨人の装甲から舞い上がる光の粒子が、歪に広がる球体を抑え込むように周りを取り股間で漂う。
暗闇の中、グッと巨人は右腕を閉じる――
「……じゃあな、デリオのじいさん」
しぼんでいく黒い球体。
飲み込まれた旗艦の上部共々、〈アトラシア〉の手の中へと吸い込まれていき、残ったのは滑らかに抉れた船の底部のみ。
ドクン……
黒い球体が光の粒子を帯びながら、開いた手の中で歪に脈動する。
今にも飲み込もうとせんばかりに――
――グルルルゥ……。
忌々しげに細める紅い双眸。

唸り声を宇宙空間に響かせ、巨人は静かに手のひらを閉じて、右腕を下ろすと、徐に辺りに目を配った。
「デイズ、アラートがたくさん……」
既に敵の渦中。
周りを取り囲んだ船から数十機のフォートギアが飛び出し、また強襲艦のレーザー砲も照準を合わせていた。
そして四方を囲む戦艦から放たれるレーザーは流星群のように一斉に〈アトラシア〉を捉えて向かってくる。
「二人ならやれるさ。……行こうか、エリス、アトラシア」
鋭い牙を覗かせニィと綻ぶ口元。
スッと巨人は外套のように纏っていた光の粒子を翻す様に身体をよじり、迫りくる光の雨に背中を向けた。
光の粒に跳ね返されるレーザー。
乱反射する光の雨は、網目状に宇宙を走り、飛び込んでくるフォーギアの群れを切り裂いていく。
悠然と翻す光の外套。
切り裂かれ宇宙を漂う敵の機体からレーザーエッジ・ナイフをはぎ取ると、〈アトラシア〉は自分の腰から々ナイフを取り出した。
そして、二本の刃をかち合わせると、逆手に持ちかえ狼の巨人は飛び散った瓦礫を蹴り上げた。
「姿勢制御はどうしてる？」
「え？」
「海の中で身体を固定させる事はない。いつも感じるのは身をよじり空を泳ぐような感覚で、水面を見上げながら浮かび上がる気持ちだ」
「……」
「――見えるか？」
「なんとなく……」
背部の装甲が開き、せり出す数枚のスラスターブレイド。
折り重なったベーンから吹き上がる光の粒、ソレと共に空を蹴る

〈アトラシア〉の関節から星屑が尾を引く。
光を纏いながら、白狼の巨人が牙をむき出し、刃を振りかざす――
「泳ぐ……海の中……」
「怖いか？」
――虚空を撫でる切っ先。
刃がフォーギアの首を断ち切り、狼は身を翻すままに背中を首なし人形にぶつけ二つの刃を後ろ向きに突き刺す。
水の中でターンをするように身体をよじり、巨人は首と両腕の千切れた人形を蹴って暗闇に飛び込んだ。
そして暗闇を切り裂く二本の刃。
近づいてくる二体のフォートギアめがけてナイフを投げ、突き刺すと〈アトラシア〉は両腕を左右に広げた。
展開される手のひらの装甲。
黒い球体が両手の平に浮かび上がり、膨れ上がるままに巨人の両腕を飲み込む。
ニィと狼の巨人は薄ら笑いを浮かべる――
「大きな手……私を掴んで導いてくれる……」
「そいつは持ってるんだ？」
――とても大きな銃。少し似合わないサングラスと、擦り切れた革靴」
「そうか」
「大きな手、大きな心――」
両手を閉じ、しぼんでいく黒い球体。
ゆっくりと腕を下ろした〈アトラシア〉の拳には肘までを覆うひと際大きな手甲が、左右に装備されていた。
白く装飾された表面。
両手の甲には黒い球体が収められ、光の粒が装甲の隙間から勢いよく吹き上がり巨人の鎧を撫でていく。
牙をむき出しニィと歪む口元。
後塵の尾を描き全速力で近づくフォートギアの舞台へと、拳を開

き片腕をかざすと巨人は手のひらに敵の群れを捉える
敵意を尖らせと紅くぎらついた目を細める――
「……力がある……」
――光の尾を引いて飛び出す巨躯。
突き出した拳。
迸る衝撃に空間が大きくたわみ、巨人の掌がフォートギアの胴体を刳り貫ぬいて吹き飛ばした。
機体を真っ二つに裂かれて、瓦礫が宙を舞う――
――グゥウウ……。
頭をすっぽりと覆う程の手のひらが飛び散ったフォートギアの頭を掴み、巨人は上半身を後続の機人に投げ飛ばした。
景色を激しく歪めるほどの衝撃。
掠めるだけで敵の機体の半身を抉り飛ばし、投げ出された鉄くずが強襲艦の底部を突き抜け、宇宙の闇へと消える。
船の中から起きる巨大な爆発。
暴走したブラックホール機関に、黒点が宇宙の闇に浮かび周囲の瓦礫を飲み込んでいく。
「アトラシア、もう少し遊ぶぞ。直に来るからな」
大きく開いた口腔。
鋭く伸びた牙が、捉えた敵のフォートギアの首筋を食いちぎり、心臓に深々と突き出した右腕が突き刺さる。
食い散らかした残骸が〈アトラシア〉の周りを漂い、狼の巨人は目を赤くぎらつかせ虚空を蹴った。
そしてより大きな獲物へと腕を伸ばす――
「……悪意が来る……」
「わかった」
――視界をよぎる閃光。
光の外套を翻し、迫るレーザーを弾くと、〈アトラシア〉は下方向から迫るフォートギアと戦艦に目を細めた。
遠くでたわむ空間。

空間を跳躍し、更に姿を現す敵の戦艦の数に、巨人は牙を覗かせ笑いを滲ませた。
グッと突き出す閃光のガントレット。
装甲が開き光の粒が蒸気のように勢いよく吹き上がって振り上げる〈アトラシア〉の腕を包みこむ。
「しかし、そろそろかね……」
振り下ろした拳から迸る衝撃はアギトを開き、敵艦の砲撃を飲み込み、フォートギアをバラバラに引き裂いた。
そして外套を翻すままにグッと戦艦に向けて開く大きな手のひら。
刹那、巨大な手形が戦艦の表面に浮かび上がる。
ギリギリッと巨人が手を閉じるままに、船体がねじ切られんばかりに、手の痕が深くなっていく。
グシャリッ
手のひらを閉じるままに、真っ二つに折れる船体。
〈アトラシア〉は腕を下ろすと、暴走する重力変異を横目に、眼下からせり上がってくるフォートギアの軍勢に目を細めた。
足元には蒼く輝くトリトンの星。
ガンッと両手のガントレットを胸元で突き合わせると、巨人は虚空を蹴り、トリフィアの空へ落ちるように飛び出す。
「どうだった、エリス……」
「――身体が、まだ少し熱い……息が苦しいかも」
広げた爪で空を切り裂くガントレット。
実弾やレーザーが飛び交う中を縫うように翔けるままに、〈アトラシア〉は敵の群れへと飛び込んでいく。
そして、突っ切って大気圏へと落ちていく――
「よくできた……今度はもっとやれたらいい」
「……うんっ」
「――さぁ、行こうか〈アストライア〉」
グニャリと歪む空間。
大気圏へと飛び込んだ狼の巨人の姿が、摩擦熱の膜の向こうに消

え、レーザーラインが虚しく空を切る。
――ドクンと脈打つ宇宙。
暗い海に帆を進める白い翼。
吹き上がる光の粒は羽衣のように滑らかな船体を撫で、ゆらゆらと空を舞う。
トリトンの大気圏上、波打つ水面から顔を出す様に、白き鎧を身にまとった船〈アストライア〉がゆっくりと姿を現した。
〈アトラシア〉相手に密集していた艦隊が射線上に映る。
「――長距離重粒子砲展開。同時に鏡面レーザー砲スタンバイします……」
船の先端、フォートギアの滑走路の下から迫り出す二枚板の細長い砲塔が、軸線上に敵の姿を捉える。
滑らかな装甲が一斉にせり上がり、顔を出すのは丸みを帯びた境面体百十二基・
二枚羽根の間に迸る紫電。
重力変異に船の先端が激しく歪む光景を横目に、〈アストライア〉の甲板に上っていた二機の〈エルザ〉が宇宙へと飛び出す。
両腕に担ぐのは超長距離用のエネルギーカノン。
せり上がった船の装甲の上に足を下ろしながら、二機の〈エルザ〉は敵の艦隊へと照準を向ける。
「火力が足りないかもしれません。ライアス、適当に撃たないでくださいね」
「了解」
「外したら死んでいいですから」
「なんでそんなに冷たいんですか……」
――光の溢れる足元。
装甲の隙間、無数の境面体から極太の粒子加速砲が飛び出すままに、敵の艦隊めがけて一斉に飛び出した。
足元から昇る熱に装甲を紅く照らしながら、〈エルザ〉は担いでいた砲塔から飛び出すエネルギーに腰を深く落とす。

放射状に広がる光の雨が一斉にデリオアの艦隊を貫く。
次々と爆発する敵の戦艦やフォートギア。
寸分と違わぬ照準は全ての敵を捉えて、一発たりと外す事無くレーザーがフォートギアの胴体を抉り、戦艦をハチの巣にしていく。
そして百十三体の敵の反応が消え、更に底部から迫り出した巨大な砲塔が残った敵部隊へと向けられる。
「……外しましたねライアス君……」
「すいましぇぇぇぇぇん！」
「〈エルザ〉は後方へ……長距離砲を発射します……」
――放たれる黒い弾丸。
二枚羽根の電磁バレルに乗って、光の尾を引きながら黒い塊がスピードを上げて敵の艦隊の中央へと突っ込んだ。
敵の中央で大きく膨れ上がるままに、広大な範囲の重力変異が起きる。
飲み込まれるフォートギアに戦艦。
黒い球体に吸い込まれた敵はもれなく鉄くずへと圧縮され、収縮する黒い球体へと潰されていく。
音もなく全て飲み込まれる――
「……敵機全て反応なくなりました」
二枚羽根が船の中へと収納され、展開していた船の装甲が元に戻る。
「ん。エディオール、ライアス。戻ってきて」
通信に従い、〈アストライア〉から離れていた二機の〈エルザ〉は方向転換を始める船の甲板へと足を下ろした
そしてハッチからハンガーへと戻ろうとしながら、ライアスの〈エルザ〉は徐に後ろを振り返った。
「……隊長は？」
「もう帰ってますよ」
「はや」
「しかし、ライアス君。少し腕落ちました？訓練でもしてあげまし

ょうか？」
「いや……まぁまた今度」
「私でなかったら、エミリア君とアリシア君が、嬉しそうに君を訓練施設に呼び出す事になると思いますが」
「獲物にくらいつくワニですか……」
発進口のハッチが閉まり回頭する白い羽衣の船。
背部の噴射口から光の粒が吹き上がり、空間を歪曲させながら、〈アストライア〉はゆっくりと進み始めた。
「じゃあ、このままトリトン第一衛星基地に向かって補給するわ」
〈……〉
「……どうしたのミカ」
〈……今度は、私があの狼に乗る……〉
「――わかったから怒った顔しないで。テストも兼ねて近くまで巡航するわよ」
〈発進します……〉

幕間：あなたとの初めて

ぽかんとしていた……。
身体がシートに座った瞬間、フゥとモニターの向こうに飛んで行ってしまうような感覚だった。
意識がグイーッって棒で広げられていくような感覚。
両手を広げたら、手の中に宇宙がすっぽり入っているような気持ち。
それは薄く広げられてるんじゃなくて、どんどんと視界がはっきりとなっていくような感覚だった。
だけど、それはとても広くて、怖かった。
多分、宇宙の中に一人で放り出される感覚戦っていて、いつも私の中に会った。
怖かった――
――エリス……。
聞こえてきたのは、低く少し淀んだ声。
ギュッと両手を分厚い手で掴まれる感覚。
コツリ押しつけられた額がとても熱っぽくて、手にうっすらと汗を掻いていて、微笑みを浮かべる紅い瞳。
大きな背中で私を受け止めてくれる。
私と一緒にいてくれる――
「……一緒に行こう、エリス」
気がつけば、私はあの人と意識と感覚を共有していた。
――哀しみ。
デリオアという人を殺さなければならないという気持ち。

私も……とても胸が苦しかった。
――興奮。
レーザーが暗闇を引き裂き、目尻をよぎるたびに、あの人の息遣いがどんどん上がってくる。
感覚が共有されて、私の意識もどんどんと興奮していくのがわかる。
――喜び。
嬉しい……とても嬉しい。
あの人は心の底から楽しんでいる。
戦う事、そして私と一緒に〈アトラシア〉に乗って宇宙を縦横無尽に駆けていく事に。
私と一緒にいる事を喜んでいる。
――私も嬉しい。
もっと傍で戦いたい。もっともっとこの人の力になってこの人と一緒に宇宙を駆けていきたい。
暗闇なんて怖くない、敵なんて怖くない。
この人の傍にいられるのなら――私は……。
「大丈夫か、エリス……？」
――囁く声が聞こえる。
それは夜明けのオオカミ……。
ぼんやりとした意識の海の中、私は、草原の広がる暗闇の向こうに上る太陽に、グッと手を伸ばすの。
大きな背中、太陽を背に、夜風に銀の体毛を靡かせる。
とても紅く優しい瞳。
この人だ。
この人が――
「……エリス、少しきつかったか？」
――沈んでいた意識が、デイズの声に戻される。
ぼんやりとした視界の中で、私はあなたを見つめる。
紅く優しい瞳。

あなたは私を見てくれる――
「……うんっ」
こうして私の初めての実戦経験は幕を閉じた。
多分、この経験は私が大人になっても忘れないかもしれないし、
ずっと心と体に刻まれ続けると思う。
私の中の、あなたを想う気持ちは、どんどんと大きくなる。
今だからわかる。なんとなくだけど……アリシアさんの気持ちが、
わかった気がした。
私も、この人の傍にいたい。
ずっと、デイズの傍にいたい――――

9話目

トリトン第一衛星基地への航行途上。
「と、言うわけで、少し遅いけどクルーメンバーの顔合わせをしたいと思うわ」
〈アストライア〉船底部分、格納庫にあたるエリア
格納庫の隅に片膝を立ててうずくまる〈アトラシア〉が項垂れていて、その巨人の頭の上からアリシアは広いエリアに集められた人を指で数え始めた。
ずらりと並べられた人間やアンドロイドは、ざっくりと配属場所に分かれ、整備員が約七割を占めていた。
残りはフォートギアのパイロットと管制室のクルー。そして健康管理事務職員、医療事務関連の職員が数名立っている。
指で数えれば４７名。
手元の名簿表を覗きこんで数があっている事を確認すると、アリシアは声を張り上げた。
「よぉしっ。皆いるようね。まずは整備クルーの皆、〈アストライア〉に乗ってくれてありがとうねっ」
張り上げる甲高い声に、皆こちらを見上げて少し強張った面持ちで、〈アトラシア〉の上に立つアリシアに視線を注ぐ。
照れくさそうに苦笑いを見せるアリシア。
クシャクシャと黒髪を掻くと、こそばゆそうに首をすくめ、アリシアは再び声を張り上げた。
「この船は特殊システムの試験運用を目的とした強襲戦闘艦よ。大体の仕様は各員それぞれの部署で把握してるとは思うけど、生まれ

たての子で外に出るのも初めてなの。結構デリケートな面があると思う。
各員はその事を念頭入れつつ、船の安全な航海の為に力を貸してください」
『ハイッ』
音程も大きさもバラバラな声が格納庫に響く。
アリシアは嬉しそうに頷くと、脇に抱えていたＰＤＡを取り出し、ディスプレイを横目に叫んだ。
「もう配置先は伝えてあると思うけど、名前と配置場所を言うわ。これを以ってゴルド・ミルドレシア、トリフィア第一基地所属提督からの正式な辞令とさせてもらうわ。
あ、後自身の個室の配置はそれぞれの担当部署の部長に伝えてもらう事にするわね」
そう言って一人ひとりの前を読み上げていくアリシアを見つめながら、大きな欠伸を上げる男が一人。
「ああ……かったるいっすなぁ」
「口を少し閉じなさいよライアス。口に縫い針でも突っ込まれたいの？」
「しかしながら……」
そう言いかけて涙の滲む目じりを拭うと、ライアスは鬱陶しそうに隣に立つエミリアから目を逸らし、手持無沙汰に頭を掻く。
「アリシアさんも変に律義な所は変わらないんですねぇ……」
「それであそこまでやらかすんだから凄いものだわ……」
「ソレ言うと、隊長また泣きますよ。それでなくても今でも多少なりと引きずってるんですから」
「知ってるわよ……」
呆れたような、うんざりしたような表情でため息をつくと、エミリアは少し離れた場所に立つ褐色肌の大男の背中を見上げた。
傍には三人の美少女。
右手にはエリス、左手にはミカと両手に花。

肩に顔を押し付けるようにして背中にマキナを背負いながら、デイズは顔色一つ変えずアリシアを見上げている。
「なんで知ってるんですか？」
「隊長の荷物の引っ越しついでに部屋の写真立て覗いちゃった」
「デリカシーの無い……」
「またおんなじことが起きそうね……」
「接続能力か……」
「私はそんな力ないし、多分アリシアもあの三人もどこまでどんな能力かはわからないでしょうね」
「……」
「隊長以外は――」
スパンッ
格納庫に響く乾いたいい音。
痛みに涙を浮かべライアスが振り返ると、そこには呆れた表情のエディオールが立っていて、エミリアは気まずそうに首をすぼめる。
「エディオールさん……」
「なんで殴るの僕だけなんですか……」
「全部隊長に聞こえていますよ」
そう言ったエディオールが指差す先、デイズは三人に囲まれながら近づいてくるアリシアに苦い表情を見せていた。
「……メンバー足りてんのか。４７で回せる船の大きさじゃないだろ」
「修理も含めてすべて３人で船の運航の九割を制御できるわ。できないのはクル―の食事だけね」
言葉を交わす二人を見つめながら、エミリアは怪訝そうに首を傾げると、後ろに立つエディオールを不満げに睨みつける。
「あのぉ……全然聞こえてなさそうなんですけど」
「〈アトラの白きインディア〉――隊長の種族、ご存知ですよね？」
「……」
「耳と目と鼻と痛覚は、本当にいいんですよ。後勘もね」

「……知覚ほぼ全部じゃないですか」
「ほら、怒られる前に前に出ましょう。辞令を受けないとね」
首をすぼめるエミリアと頭を押さえるライアスの背中を押すと、エディオールはアリシアの下へと歩み寄る。
そして４人と３人の子どもが集まったのを確認し、アリシアは手元のＰＤＡに指を這わせる。
「戦闘要員は集まったかな。……まぁエミリアはブリッジクルーだけど」
「どうせ予備の〈エルザ〉もあるし、なんかあったら私も出るんでしょ？」
「お互いね」
おどけたそぶりを見せるアリシアに、エミリアは驚いたように目を見開いて彼女を指差した。
「あらら……アリシアってフォートギア動かせたっけ？」
「おっす。伊達にデイズのお尻をストーキングしてないわ」
「背筋が凍りそうだ……」
げんなりとする大男にニッコリと微笑みを浮かべると、改めてアリシアは管制室のクルーを含めて計１４人に目を向けた。
「さて、ブリッジクルーに関しては、これからリンケージチルドレンの補助を含めた管制事務全般を行ってもらう。
確かに管制全般は３人のうち一人が行うのだけれど、あなたたちの役割がなくなったわけじゃないわ。その力で艦を助けてもらいたい」
『ハイッ』
６名の女性陣が一斉に声を張り上げるのを見て、デイズは腕を組みながら感心したように目を丸くした。
「ブリッジは全員女性か……よく集めたもんだ」
「股間が熱くなる……」
「謎の故障でお前のフォートギアが爆発するのも時間の問題だな」
「シャレにならないからやめて！」

ニヤニヤとこちらを見つめるエミリアに顔面蒼白になりながら、ライアスは喉もカラカラに叫んだ。
と、アリシアは残った7人のメンバーに歩み寄る。
「次、機人乗りのメンバー。……エリス、ミカ、マキナ」
呼ばれて3人はデイズの手をつかんだまま、恐る恐るアリシアの前に躍り出た。
ニッコリッ
屈託なく笑顔を見せるアリシアにエリスは怪訝そうに首を傾げながらも、差し出される手に自分の手を重ねた。
「えと……」
「――戦いは怖いわ。あなたはいち早くそれを経験しただろうけど」
「……」
「そしてその戦いは、おそらくこれからも続き、そしてそれはもっと苛烈に自らの心を黒く押しつぶしていく。
心が耐えられなくなるくらいに……」
そう言いながら、アリシアはデイズの傍にいたマキナとミカも同様に手招きする。
「あなたたちはチーム。デイズを中心にしたチーム……それをしっかりと覚えなさい」
「……」
「デイズを頼りなさい。苦しくなったら自分で抱え込まないで、彼に全て相談して、言葉を貰いなさい。
彼はあなたたちを救うわ、必ず……」
照れくさそうに微笑みながらそう言うと、キョトンとしている3人の頭を軽く撫で、アリシアは後ずさった。
「さっ、私の臭い演説はこれまで。これからきりきり働いてもらうわよっ」
照れくさそうに笑みを浮かべ、顔を耳まで赤くするアリシアの言葉に、驚いて顔を引きつらせるエミリア。
対してライアスは今にも飛び出る笑いをこらえようと腹を押さえ

る。
「アリシアも……妙なセリフ回しを……」
「いやぁ……アリシアさんもなんというか」
「ライアス・ホーネスは今から1週間トイレで生活する事」
「まだ何にも言ってないでしょぉおおおお！」
ぶわっと涙を流すライアスを横目に睨みつけながら、アリシアはフンッと鼻を鳴らして白衣を翻した。
「はい。じゃあ敬称略でエミリア。エディオール。デイズ。ゴミクズ。あなたたちフォートギア部隊の隊員として命名します。エミリアは兼任で頑張って」
「ちょ……アリシアさん。さっきの話ガチですか、僕トイレの住人になるんですか？」
「今度口開いたらすり潰すわよごみ虫が……」
「すんましぇん……」
ぎろりとヘビに睨まれた草食動物の如く、ライアスはペタンとその場にへたり込んでがたがたと震える。
そして膝を抱えて白く灰化するライアスにデイズは肩をすぼめると、たしなめるようにアリシアに呟いた。
「アリシア……あんまりライアスをいじめるなよ」
「た……隊長……」
「これからもっとエミリアにいじめられるんだ。最初から飛ばしたら身体が持たないだろ」
「もっと僕に優しくしてぇえええええ！」
「部屋割は？」
頭を抱えてうずくまるライアスを横目に、首を傾げるデイズにアリシアはじぶんのＰＤＡを差しだす。
画像はディスプレイに映り、そこには立体状に浮かび上がる〈アストライア〉。
半透明になった艦の居住区には個室と共同部屋がいくつか設置されていて、個室には自身の名前が見える。

そこにはデイズの名前があり――
「――おい」
「見づらい？データ送るわね」
「おい」
顔の引きつるデイズを尻目にアリシアがＰＤＡを操作すると、その場にいた全員に艦内の情報が送られる。
更に引きつる口元。
デイズは送られてきた情報を食い入るように見つめ、ため息を漏らした。
「……じじいの案か？」
「私発案、じじいが了承」
――そこにはデイズのほかに３人の名前が共同で記載されていた。
「お、隊長の部屋一番広いっ。いいなぁ」
「……少し黙れライアス」
青筋を頭に浮かべながら、惚けた声を漏らすライアスに八つ当たりを呟くと、デイズは苦い表情でＰＤＡを覗き込む。
そして目を擦り、頬を軽く叩き、何度も画面を覗き込む事１分。
程なくして、デイズは深いため息と共に腕を下ろすと、不思議そうに足元で首を傾げる３人にＰＤＡを手渡した。
「……どういう事？」
「親睦を深めるためよ。あなたたち４人の相性がこの艦で最も重要なのは、クルー全員に通知しているわ」
「しかし……この子たちにもプライベートがある」
「優しい物言いをするのね。そういう所が好き」
屈託なく笑うアリシア。
デイズは更に苦しそうに顔を歪めると、苛立ち紛れに頭を掻いては深いため息を零し、アリシアを睨みつけた。
「確かに……俺のプライベートを覗かれることに抵抗もある。否定はせん」
「彼女たちは知りたいと考えているわ」

感じるのは熱っぽい視線。
そう言ってアリシアに、デイズは気まずそうに細めていた目を開き、上目づかいに見つめる3人に首をすぼめた。
「お前ら、自分の生活にこんなおっさんがいて、嫌じゃないのか？」
エリスは少し強張った頬を赤らめながら、力強く金色の髪を左右に振る。
「私……デイズと一緒にいたいです……他の人じゃいやです……」
「――私……お父さんと一緒にお風呂入りたい……」
そう言って顔色を窺うように父親の顔を見上げながら、ミカはデイズの腰にしがみついて離れない。
エリスも同じくデイズの腕に掴まり、デイズは重たそうに肩を落としながら、難しそうに顔をしかめた。
そして最後に、躊躇いがちに佇むマキナを見下ろす――
「……マキナはどうする？」
「ん……えっと……」
頬は照れくさそうに紅く、マキナは胸に手をあてたまま、どこか気まずそうに視線を泳がせている。
そして、濡れた唇を軽く噛み、マキナは戸惑いがちに少し俯く――
「……おじさん……」
「ん」
「私も……えと、おじさんと一緒にいちゃダメかな？」
そう言って、はにかんだ笑みを浮かべながら、マキナは途切れ途切れに言葉を並べ、中年男を見上げた。
零れる小さなため息。
デイズは無言で立ち尽くすマキナをそっと手招きすると、トトトトッと小走りで近寄る彼女の額を撫でた。
不安に少し揺れる灰色の瞳。
少し荒い息遣い。
サラリと金色の髪が掻き上げられ、熱っぽい白い肌の感触が分厚い手に伝わる。

手のひらに感じるのは不安と焦燥と――
「――後悔するぞ」
「……？」
「おっさんはこう見えてデリカシーやマナーがまるでなっていないからな」
「……えへへっ。私もまなーがないから大丈夫だもんっ」
困ったように複雑な笑みを滲ませる男に、少女は照れくさそうに笑みを浮かべ、ほっとした様子で頷いた。
ギュッと腕に食い込む小さな手。
しがみつくマキナに、肩が両方とも重くなり、身体を前のめりにしながらデイズは少し疲れた様子でアリシアを見上げた。
「アリシア。全員の部屋の配置変換はナシだ」
「じゃあ、ライアスだけ――」
「部隊長として言っている……」
「冗談よ」
可笑しそうに笑いながら目はあまり笑っておらず、デイズは怖々と首をすくめると3人を引き剥がした。
「部屋に戻れ。俺も後から行くから」
『はいっ』
3人とも手を上げて元気よく声を上げると、踵を返して一目散に走り出した。
整備員組の方も一応の話が終わったのか、飛び出す三人に合わせるようにぞろぞろと格納庫から離れ始めた。
肩はまだ重たく固まっていて、デイズは軽く肩を回しながら、恨めしげにアリシアを見つめる。
「……少なくとも、ミカはお前の娘だろ」
「ただのコピーよ」
「――胸やけがするよ、お前の考えには」
「私にとってアレはモノ。あなたへのプレゼントと受け取ってもらっても構わないわ」

「悪趣味極まりない……」
深いため息を漏らすままに、デイズは踵を返し背中を向けてエディオール、エミリア、ライアスに手を振った。
「二時間後にハンガーで招集をかける。少し作戦やらなんやら練り直さんとな」
「私もですか隊長？」
「ブリッジの仕事は暇だろ。少し付き合えよエミリア」
「はぁいっ」
「――子どもたちが待ってる。また後でなアリシア」
格納庫を出ていくデイズにエミリアは手を振り、アリシアは複雑な表情を浮かべたまま顔をそむける。
片やライアスは床に膝を抱え蹲りながら、ボロボロと感謝の涙を流していた。
「う、うう……隊長。僕便所で暮らさなくて済むんですね……」
「そのトイレが男子か女子かと決まってなかったはずなんだけどね」
「！？」
驚愕に強張る顔。
今にも目玉が飛び出そうなほどクワッと目を剥いて凍りつくライアスを横目に、エミリアは同じくアリシアに手を振る。
「じゃ、私部屋に戻るねアリス」
「――エミリア……」
そう呟き、顔をしかめ、どこか申し訳なさそうに首をすぼめるアリシアに、エミリアは困った表情を浮かべて頭を振った。
「……私が言えた事じゃないけどさ、その恩着せがましい物言いを少し引っ込めたら、隊長も納得するんじゃないの？」
「……私は、あの人にひどいことをした」
「知らんですしおすし」
「……」
「筋が通らないって話よ。昔ひどいことをしたからって今更、恩着せがましい事をしてほしいとは限らないでしょ。

隊長は今何を望んでるんでしょうね？」
「……」
「リンケージチルドレンなら、少しはわかるんじゃない？　私は連中の考えなんてわかんないけど」
そう言って出ていくエミリアに、アリシアは複雑そうな表情を浮かべて項垂れた。
「……繋がる、か」
「エディオールさん離してぇえええええ！　僕は女性トイレの住人になるんですぅううううう！」
「宇宙空間に放り出される前に行きますよライアス君」
バタバタと四肢を広げて暴れるライアスを引っ張りながら、同じくエディオールは格納庫から出ていく。
残ったのは一人だけ。
アリシアは重たい足取りで格納庫の隅に蹲る狼の巨人の下へと歩み寄ると、滑らかな装甲に手を這わせた。
フワリと舞い上がる光の粒子。
頬を撫でる熱っぽさ、首をすくめるとアリシアは、自らが作った機械のオオカミを見上げて手を伸ばす。
「私……どうすればいいのかな」
巨人は項垂れたまま身じろぎとつなく、そしてただ冷たく紅い目をアリシアに向けるのみ。
「アトラシア……私……デイズに何をしてあげたらいいかな」
――グルルルゥ……。
低いうなり声が格納庫に響く。

10話目

「……アホが」
「？何のことです隊長？」
「――――――。ライアスの事」
膨れ面を見せドスドスと廊下を踏み歩くライアスの背中を見つめながら、デイズは鬱陶しそうに眉をひそめた。
ライアスはというと、ブツブツと何かを呟いているだけ。
「くっそ……トイレの住人なら、カメラ設置して色々強請ったりしてキャッキャうふふしたりして」
「犯罪者の思考だな」
「隊長が悪いんですよっ、僕はトイレの住人でも構わないって言うのに」
「男の便所なら空いてるんだけどな……」
「女、女が良いんですぅうう！」
――ニィと牙をむく口元。
「……あいているわよ。女性用のトイレ」
「どこ？」
長い栗色の髪を靡かせながら、地団駄を踏むライアスへと、エミリアはゆっくりと歩み寄る。
ヌルリと大きく開いた手を伸ばす。
「私の部屋」
「……え？」
――頭に食い込む爪。
頭を鷲掴みにされ、ブランと宙につりさげられながら、ライアスは青ざめた表情でエミリアの顔を見上げる。
――ニィと細める鋭い双眸。
カタカタと震え始める小動物を見下ろし、エミリアは本当に嬉しそうに囁く。

「一日でいいわ。私の部屋のトイレで暮らしなさい」
「え……あ……」
「いいですよね、隊長」
楽しそうに問いかけるエミリアに、デイズは怖々と首をすくめながら無言でコクコクと頷く。
どっと噴き出る汗。
股間から少量の尿を垂れ流しながら目にいっぱい涙を浮かべるライアスに、エミリアは顔を近づける――
「……たっぷりと教えてあげる」
「あ……」
「『恐怖』ってものをね……」
クワッと見開く目に、ブワッと股間から零れる黄色い汁。
ズルズルと引きずられて、エミリアと共にその場を後にするライアスに、デイズは申し訳なさそうに小さく手を振った。
「……丸一日。とりあえず助けには行けないからな」
「え……隊長、隊長……？」
「壊すなよ、後で復元するのが面倒だからな……」
エミリアは肩越しに手を振って廊下を後にする。
そして遠くからライアスの断末魔の様な悲鳴が轟き、デイズは指で耳を塞ぎながら鬱陶しそうに顔を背けた。
対してエディオールは柔和な笑みを浮かべ、ライアスの悲鳴と嬌声に耳を傾ける。
「子犬の調教も手慣れたものですねぇエミリア君も」
「……何度も言うが、あんまりライアスをいじめるのは好かんのよな」
「おや、そうでしたか？」
「エミリアとアリシアが楽しそうにしてるだけだよ……」
「ライアス君もですよ」
「――寒気が走る」
十字路に入り、「ではまた」と言って頭を下げるエディオールに

手を振りデイズは背中を向けた。
ポケットに手を突っ込み取り出すネクタイ。
未だワイシャツ姿のまま着替えておらず、デイズは汗臭さを鼻に覚えて苦い表情を浮かべながら自室へと歩く。
（……さて、子どもたちはおとなしくしているだろうか）
淡い期待を持ちながら、デイズは自室の扉の前に立つ。
ドアの隣には遺伝子情報を読み取るリーダー。
デイズはスッと指先を読み取り部分に重ねると、開いた扉の向こうに一歩を踏み出そうとした。
『お帰りなさいっ』
ピタリと止まる足。
そこには入り口付近に並ぶマキナ、エリス、ミカの姿があった。
身体の大きさに合わせた軍服は本当に小さく、サイズの関係でフリルスカートの丈が短く見えた。
胸元にはスカーフが下げられていて、その姿は学校の制服にも見える。
「えへへっ、これ私たちの制服だよっ、おじさん」
「ど、どうですかデイズ……」
「――お父さん……」
少し照れくさそうに顔を染めるマキナ。
エリスは恥ずかしそうに俯きながら上目づかいにデイズを見つめ、ミカは相変わらず少し惚けたような表情で、立ち尽くす父親の下に歩み寄る。
デイズはキョトンとして三人を見比べると、怪訝そうに首を傾げながら胸元のボタンをはずし始めた。
「……そんな制服、うちの基地にあったか？」
「軍の、学校の制服だって……言ってた……」
「――なるほど」
「お父さん……」
「良く似合ってるよミカ」

撫でてほしそうに頭を下げるミカに、デイズは困ったように笑みを滲ませそっと黒髪を梳くように撫でた。
そうしてワイシャツのボタンを取り、胸元を肌蹴させながらデイズは部屋の中に一歩踏み出る。
閉じる入り口の扉。
部屋を見渡せば、確かに四人が暮らせる程度の大きさの空間がリビング、寝室共々確保されていた。
「そういや、ここの船の設計はどこぞのキチガイ女だったな……」
リビングの部屋の壁にそなつけられたモニターに、自身の苦い表情が映って入て、デイズはさらに憂鬱な気持ちであたりを見渡した。
備え付けられたバーカウンター。
その奥には冷蔵庫と並んで大きな戸棚があり、ピッチャーとグラスが所狭しと並んでいるのが見える。
部屋の隅にソファーとコーヒーテーブルがあり、三人の服がソファーの上に散らかっている。
明りは少し暗く、夜のバーラウンジをほうふつとさせる場所に男は顔を引きつらせる。
「……親父共々良い趣味してるわ」
「……」
と、背中に刺さる熱い視線。
ネクタイをソファーに投げワイシャツを脱ぎ捨てながら、デイズは眉をひそめ
後ろを振り返ると、食い入るように覗きこむ三人に首を傾げた。
「……珍しいか？」
顔は三人とも少し紅く、まずエリスは気まずそうに首をすぼめてフルフルと金色の長い髪を左右に振る。
「う、ううん……なんでも」
「――おっきな……胸板」
「おじさんって……筋肉結構あるんだね」
俯きながら3人はそう呟き、それでも視線は外すことなくワイシ

ャツを丸める大きな胸板を見つめる。
視線は舐めわされるが如く生温かく、デイズは首をすくめると、ワイシャツをソファーへとへと放り投げた。
「お前ら、シャワーは浴びたか？」
「いえ……私たちも後でデイズと作戦会議に出たいなって思って。それでこの服を着ようって思って」
「エミリアやライアスと違って、お前達がおそらくこの船で一番疲れている。少しでも身体を休めておけ。
艦とフォートギアの二枠しかないのに、三人いるのはそのためだからな」
「うう……でも……」
渋るエリスの背中を押すと、デイズはシャワールームの方向へと三人を指差した。
「ほら、重力は効いているから大丈夫だ」
「お父さんも一緒に……」
「仕事が残ってる。これでもお父さんは高給取りなんでな」
「うんッ……今度一緒に入るから……」
「――約束な」
気まずそうに首をすくめるデイズに、ミカは無表情のままコクコクと頷くと二人と共シャワールームに赴いた。
シャワールームへと甲高い声が遠のいていき、デイズは深いため息を漏らした。
「……疲れる」
虚ろな視線を泳がせながら、ふと目につくのは、コーヒーテーブルの上に置かれた自身のＰＤＡ。
デイズはソファーに身体を沈めると、ＰＤＡの画面を指でなぞり操作した。
そして画面に映るのは、懐かしい老人の顔。
『おお、デイズか。そっちはどうじゃ？』
「……てめぇのせいでどっと疲れてるよ」

『そうか子どもたちが嬉しそうで何よりじゃよ』
髭をさすりながら嬉しそうに喋る老人の顔がＰＤＡに映る。
デイズはうんざりとした面持ちでＰＤＡを向かいのソファーに投げ飛ばすと、不快感も露わに呻いた。
「……あんたがやりたかった事はそう言う事かよ」
『やめるか？』
部屋の壁に埋め込まれたモニター画面に光が灯り、更に大きくなった老人の顔が映し出される。
デイズはフンッと鼻を鳴らすと、よろよろと立ち上がるままに壁に手を這わせた。
「……三人が悲しむ」
『知っとる』
「半端にやめる趣味はない。とりあえずあいつらが飽きるまで付き合うさ」
『――永遠に来んと思うがの……』
「子どもの趣味なんてコロコロ変わるさ、きっとな……」
壁に取り付けられたボタンに這わせる指。
ガシャリッ
天井が開き、備え付けの戸棚がせり出してくると、デイズは中に納められた軍服に手を伸ばした。
『第一印象が全てを決める場合もある。お前が其処らへん一番良く知っておるんじゃないのかの？』
「娘をしつけたのはあんただろうが……」
『あの子をあそこまで変えたのはお前じゃ』
「――――」
『あそこまでお前にのめり込ませたのは、他でもないお前のせいじゃよデイズ・オークス』
「人のせいにしやがって、むかつく……」
袖のボタンを留めながら、吐き捨てるため息。
黒を基調とした軍服を身につけながら、デイズはニヤニヤと口元

を歪めるゴルド老を画面越しに睨みつけた。
老人は軍帽を頭に乗せると、ニヤつく顔を隠す様に項垂れる。
『まぁあれよ。観念しろってことじゃ。ワシは何人ひ孫ができるか心待ちにしとるぞ』
「その前にお前の娘に殺されそうだ……」
『一緒にしつけてやりなさい。好きじゃろそういうの。アリシアはもうお前以外見とらんようじゃし』
「黙って死んでくれ……」
下品な笑い声を滲ませるゴルドを睨みつけると、デイズはうんざりとした顔で戸棚に手を伸ばした。
中には軍帽と、傍にそっと置かれた巨大な獅子鼻のリボルバー拳銃。
天井に収納される戸棚。
帽子をかぶり、銃を腰に差し込むと、デイズはカウンターの上に腰を落としながら老人の話に耳を傾けた。
『さてデイズ。調子はどうかの？』
「何から聞く？」
『端的に頼む。……〈アトラシア〉はどうじゃ？』
「……化け物」
『じゃろ』
「リンケージによる物質創成能力は、アリシアと組んでいた時より向上しているな。あれがアトラシアの力なのか、エリスの力なのかはまだ知らんが」
『両方じゃ。……今回はどんな武器ができた？』
「でかいガントレット。今整備班があの装備を解析して機構を調べてるところだ」
『どうせ次のがすぐ出てきて追いつかんよ。やめときなさい』
「俺は止めたさ。てめぇが集めた整備班がどうしてもって、変態心むき出して鼻息吹っかけてきたんだよ」
『にょほほほっ』

「相変わらず腹立つ……」
ムスッとするデイズに、老人はとても嬉しそうに笑いながら、おどけたように小さく肩をすくめた。
『乗った感想は？』
「ブラックホール機関も安定していて出力も予想以上だ。星一つ滅ぼせる戦力相手でも、殲滅は可能だろうな。無論三人が耐えられるのならの話だが」
『相性は？』
部屋の奥、シャワールームから聞こえる嬌声。
マキナの笑い声、そして少し戸惑うエリスのか細い声。
そしてステンとミカが足元を滑らせる音。
混じり合う甲高い声が聞こえて、デイズは顔をしかめると、ニヤニヤと口元を歪めて肘かけに頬杖を突く老人から目をそむけた。
「……まだエリスとしか乗ってないさ。ミカはおそらく乗らんでもわかるが」
『なぜじゃ？』
「――アリシアと同じさ。時々危うい目つきで俺を見る」
『……』
ふいに顔を強張らせる老人を横目に、デイズはカウンターから腰を上げると、奥の冷蔵庫に顔を突っ込んだ。
「マキナがまだなんで報告はできんが、関係は概ね良好だろうさ。後は三人が戦いになれるだけだ。
それが面倒なんだがな……」
『……そうか』
少し沈んだ声のゴルドに、デイズは冷蔵庫から取り出したガラス瓶を片手に、驚いて目を丸くする。
「どうしたよじいさん……」
『すまんと思ってる……それだけじゃ』
「だったらアリシアをできるだけ俺から遠ざけるようにしてくれ。あれじゃアイツが苦しむだけだ」

『あの子が望んだことじゃ』
「……ならいいさ」
『優しいの……』
「気持ち悪い物言いだ。帰ったらそのケツ蹴飛ばしてやる」
戸棚からガラスコップを取り出しながら、デイズは短く言葉を切ると、ガラス瓶に満ちていた真水をコップに注ぎこんだ。
トクトクと水の満ちる音が耳を潤す。
コツリとカウンターを撫でるガラス瓶の音がやけに響き、デイズはカウンターに背中を預けながら水を喉に注いだ。
『……デリオアの部隊の人間を数人捕まえたんじゃよ』
「アレからまだ降下した連中がいたのか」
『今はこっちで拷問中じゃが、面白い話が聞けた』
機嫌が戻ったのか、ニヤニヤと口元を綻ばせながら老人は喜々として語る。
『いいぞぉ。脳味噌に電極差すだけで簡単にしゃべってくれるからの。最近は便利じゃ生爪剥がさんですむんじゃからな』
「はいはい……」
『今でも数人のブレインは自白剤に付け込んでアヘ顔晒しておるよ。写真も撮ったぞ？』
「だれが得するの……？」
『善人面しおってからに』
「その口閉じないとあんたの頭からねじ切るぞ……」
バキリと手に持っていたグラスに走る罅。
老人は苦笑いを浮かべ、おどけたように肩をすくめると、息を整え再びむっつりと顔をそむけるデイズに話を続けた。
『まぁ結論からいえば、お前達がトリトン第一衛星基地に行く事がすっぽ抜け取る』
「……クル―は全員手前味噌で集めたんだろう？」
『ケツの皺まで全員抜かりなく調査済みじゃ。あの子たちの皺の数も知りたいかの？』

「黙って話を続けろくそじじい……」
頭痛が激しくなり目尻を押さえながら項垂れるデイズに、老人は可笑しそうに肩を震わせる。
『くくっ……筒抜けてるのはワシの方じゃの』
「デリオアじいさんが動いたんだから、どう考えても唆してるの手前の血筋だろうが」
『今は少し客人を呼んでおるよ。懐かしいワシの甥っ子じゃ』
「……」
『まぁ、もしかしたらそっちにどちらさんかが顔を出すやもしれんの』
「ザールが出たら？」
ニィと歯をむき出し零れる笑み。
しかし鋭く細めた眼は血走り、老人はニヤける顔を隠す様に軍帽を目深にかぶり項垂れると、画面越しのデイズに唸り声を滲ませた。
『……デイズ。敵をどうするか、ワシはしっかり教えたはずじゃ』
「……これでもあんたの下で、対人暗殺部隊を指揮してたんでな」
『肉片一つ残すな、敵は全て皆殺しにしろ』
「相変わらず迎合できん考え方だ」
『――そろそろ、甥っ子が来る時間じゃ。気をつけて航海するんじゃぞ』
温和な顔に戻ったゴルドの顔が程なくして消え、再びモニターに暗転が広がる。
それでも耳障りな老人の戯言が頭にこびりつき、デイズは小さなため息と共にコップをカウンターの上に置いた。
ガラリッ
ドアの開く音が遠くから響く。
ソレと共にぺたぺたと濡れた足音が聞こえていて、デイズはガラス瓶を片手にカウンターから立ち上がった。
「にゅぅ……のぼせましたぁ……」
そこには肌を朱色に染めるエリスの姿。

まっ平らな体はタオルに巻かれていて、耳まで顔を真っ赤に染めながら、エリスはふらふらとデイズの下へと歩み寄る。
ストンと伸ばした両腕に吸い込まれる華奢な体。
軽く目を回すエリスを抱き寄せながら、デイズは彼女の幼い顔を覗きこみ困ったような笑みを滲ませた。
「まったく……湯に体を浸していたのか？」
「うん……マキナちゃんがお湯で遊ぼうって言って……」
「後で叱っておかないとな」
「ごめんなさいぃ……」
「いいさ」
そう言いながら、デイズはそっとマキナの身体を胸元に抱え上げるとソファーにそっと寝かした。
そして再び聞こえるシャワールームの扉の音。
バタバタと騒々しい足音が聞こえてきてソレと共に、濡れた髪を靡かせマキナが勢いよく飛び出した。
「シャワー気持ちいいっ」
「――のぼせたの……」
顔を真っ赤にしてゆらゆらと小さな身体を揺らすはミカ。
デイズはカウンターの奥、流し台に掛けられたタオルを水にぬらしながら、肌を主に染める娘に手招きをした。
「来なさい」
「――うんっ」
俯いていた表情が仄かに明るくなり、ミカはトトトッと歩み寄るままにひんやりとしたタオルに額を濡らしてもらう。
汗の滴る頬が軍服を濡らし、デイズは困った表情を浮かべ、ミカを抱きすくめた。
「……あんまり勝手がわからんな。アリシアの時もこうなのか？」
「……お母さんは何もしない。お父さんは一緒にいてくれる」
「こんな中年でよければいくらでもいてやるよ」
無表情の中に浮かぶ、はにかんだ微笑み。

ギュゥと細い腕が首に絡み、デイズ抱きつくミカの濡れた髪をそっと撫でると、小さな躯体をソファーに横たえた。
そして、最後にキョトンとするマキナを見下ろし、デイズは苦笑いを滲ませる。
「……マキナ。長風呂は体に毒だと知らんのか？」
「えへへっ……お風呂広かったから」
照れくさそうに笑うマキナ。
デイズは呆れた様相で膝を折ると、熱に赤らんだマキナの両頬を軽く引っ張ってジトリと睨みつけた。
「広くても早く戻ってくること、わかったなマキナ」
「にゅぅ……」
「でないと一緒に風呂に入ってやらんぞ？」
「――いじわるぅ……」
「いい子だ……」
そっと頬から手を離すと、デイズは口を尖らせて恨めしげに上目遣いをみせるマキナの髪を撫でる。
ジトリと見つめる灰色の澄んだ瞳。
マキナは何か言いたげにくちをもごもごと動かし、デイズの顔ににじり寄る。
デイズはなだめるようにマキナの髪を撫でる――
「わかってくれたら――」
遮られる言葉。
目をつむって突進を仕掛けるマキナに、口が小さな唇に塞がれ、デイズはギョッと目を丸くした。
マキナは目をつむったまま顔を真っ赤にして唇を押しつける――
「……ぷはっ」
後ずさるままに零れる大きな吐息。
マキナは複雑な表情で固まるデイズの顔を上目遣いに覗き込むと、照れくさそうに微笑みながら頬を上気させた。
「えへへ……仕返しにキスしたっ」

「……。お前がそういう事するとな」
――トトトッ
小走りで駆けてくる足音が二つ。
ふわふわと揺れる長い黒髪と金色の髪。
デイズは軽く自分の口元を拭うと、更に複雑な表情で、にじり寄るミカとエリスから後ずさった。
「……するの？」
ミカは無表情のまま力強く頷き、エリスは恥ずかしそうに項垂れて、小さく一回だけ。頷いて歩み寄る。
そしてズイッと近づく小さな唇。
ため息は止まらず、デイズは片膝を床につけると、躊躇いがちに自分の頬を指差した。
「あんまりこういうのは得意じゃなくてな……頬にして――」
「――やだもん……」
そう言ってギュッと首巻きつく細い腕。
顔をグイッと近付けるままに、小さな唇がデイズの口元を這い、チロリと小さな舌が口の中を舐める。
戸惑うデイズに少し興奮した息遣いが掛かる――
「……お父さん可愛い……」
ツゥと離した舌先から男の口元まで垂れる涎。
妖しく微笑む口元。
濡れた唇を軽く指でなぞると、小さな舌を出して、ミカは小さな声で囁くと顔を赤くするデイズに背中を向けた。
そしてトトトっと小走りに寝室へと走っていく――
「――くそっ……変なところだけ母親に似やがって……」
「わ、私もっ」
少し緊張した声。
はっとなって振り返った先には、首元に小さな手を伸ばす、緊張気味のエリスの唇があった。
コツリッ

キスをしようと飛び出した矢先、飛距離が足らず胸元にエリスは顔をぶつける。
ジンワリと滲む涙。
鼻を押さえながら、エリスは強張った顔を真っ赤にして恐る恐るデイズの顔を覗きこもうとする。
「あ……あぅ……あぅ」
「エリス……」
「私……その……デイズと……」
「――こうするんだ」
グッと腰に這わせる分厚い手。
涙をいっぱいに溜めた目を見開くと、エリスは引き寄せられるままに半開きの唇をデイズに顔を近づけた。
口元に這わせるうっすらとした唇。
惚けた紅い唇に這わせるように舌で舐め、時折覗かせる小さな舌を分厚い舌で吸い出す様にして絡める。
惚ける口の端から涎が滴る。
興奮に息ができず、エリスは惚けたように重たい瞼を閉じる。
ギュゥと爪が軍服に食い込む――
ツゥと突き出た小さな舌から垂れる涎。
なだめるようにそっと金髪を撫でると、デイズはそっとエリスの唇から舌を離し、口元を指でなぞった。
そして、困ったような表情で、惚けるエリスの額をそっと撫でる。
「……よく覚えておけよ」
「――うん……キス……好き」
「……いい子だ」
そっと汗の滲む額をそっとなぞるままに、デイズは立ち上がると、顔を真っ赤にして硬直するマキナの背中を押した。
「ほら、着替えてきなさい」
「――おじさん……えっちぃ」
「これでも童貞だがな……」

顔を真っ赤にして首をすぼめるマキナに、デイズは苦笑いを見せ、おどけた調子でそう告げた。
「少し早いが仕事に行く。お前達はちゃんと寝とけよ」
「……帰ったら、私にも教えてくれる？」
「――時間があったらな」
「う、うんっ……」
「いい子だ……」
濡れた髪を撫でるとデイズは襟元を軽く整えながら、惚ける二人を背に部屋を出て行った。
ぽかんとするマキナ。
エリスはボォと顔を上気させたまま、ピクリとも動かず、いそいそと部屋を出ていくデイズの背中を見つめる。
「おじさん……」
「……きもちよかった……」
天井を見つめながら目を丸くしたまま呟くエリスの横顔、マキナはきょろきょろと興味深そうに覗きこんでいた。
「……どんな感じ」
「……息できなくて……胸がどんどんとなってデイズの息遣いが聞こえてきて」
「うん……うん……」
「――寝ますっ」
真っ赤になった顔を伏せて寝室へと走っていくエリスに、マキナは慌てて追いかけた。
「ま、まってよぉ。エリス教えてぇ」
「やだぁっ。変な感じだもんっ。胸痛くなるんだもんっ」
「教えてよぉっ」
寝室に寝息が聞こえるまで、二時間。
それまで二人と時折三人の会話が絶えず響いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3725z/

夜明けのオオカミ―The Days of Atrazia―

2011年12月13日08時47分発行